

21162

ホルデン、ピー、ハウン著

小山正武譯

基督敎天啓論

東京 教文館

40 5 18
内交

自序

本篇は、予が昨年夏期シラキユース大學校に於て、披讀せし所の原稿を聊か補述したる者なるが故に、其論體は當初予の志望の痕迹を尙ほ存留せる所あり。本論は元と普通一般信者が、多く惱まざる所の通俗宗教的思想に係る諸難題を解かむが爲めに發せる者にして、而かも彼公然たる未信者の爲めにせる者に非ず。故に彼煩瑣なる抗論即ち濫抗濫答的精神の存立する諸點に對して、之を辯破することに勉めたりと雖も、其濫抗に屬せざる者には一つも論及せず。然れども、予は各問題の固有的光明に由りて、本題研究者の眞摯なる意志の爲めに切到に之を述べたる者とす。

本論の純眞至要點は他無し。天啓に關する諸問題は彼抽象的に之

を研究すべき者に非ず。此諸問題に對する解釋の困難と云ふ者は抽象論の偽謬に由れり。此偽謬を匡し救ふの法は、唯具體的諸件を具體的に論究するに在るのみ。

予は聖書批評に於る最終極致の言語が、本篇を以て述べ盡されたりとまで、敢て自から思ふ者に非ずと雖とも、而かも聖書の實際價值は今予が茲に勸むる所の方法を以て之を判定せざるべからず。而かも天啓なる者の有效的辯護と其推薦とは必ず此方法に由らざるを得ずと、予は確信する者也。

千八百九十八年八月

ボルデン、ピー、バウン識

緒 言

聖書研究の大切なること固とより言ふを俟たず。而かも之を學ぶに、其順序と其要領とを得るを最も大切とす。苟くも其要領を得ざるときは、徒つらに文字の末に拘泥し、徒つらに枝葉に流れ、彼小理窟的弊孔に陥ひること多きを免かれず。此弊孔たる、一方に於て、本人自から此に陥る者あると同時に、他の一方に於て、教外未信者、即ち儒教若くは佛教若くは無神論者等の妨害を被むる者亦尠からず。此際に當り、初歩信徒をして、能く恒に自から卓立確守せしめ、以て外來の妨害を排除せしめ、以て内來の誤惑を脱せしむるの途は他無し、唯聖書天啓の概念を十分明確ならしむるに在るのみ。バウン博士此に見る所あり、爲めに此書を著はし、以て其必要に供す。此書一小冊子と雖とも、聖書研究の

大要領を明示し以て入門初步信徒をして其由るべき所を認識せしむるに足れり。是れ吾國方今求道者及び初步信者の爲めに萬々不可缺的の必要指導の一つと謂はざるを得ず。故に之を譯述し以て目下の需めに應ず。

若夫れ譯文の拙は切に兄弟姉妹諸君の教正を仰ぐ。

明治三十九年五月

譯者謹識

基督教天啓論

目次

- 第一章 基督教の天啓
- 第二章 基督教の天啓とは何ぞや
- 第三章 基督教天啓の價値
- 第四章 聖書は靈感乎口授乎
- 第五章 聖書の無謬
- 第六章 聖書と天啓
- 第七章 自然的及び超自然的
- 第八章 文學的及び教理的
- 第九章 進歩的天啓

基督教天啓論

ボルデン、ピー、バウン氏著述

第一章 クリスト教の天啓

(1) 吾人「クリスチアン」の信仰は左の如し。曰く「神は種々様々の時に於て、又種々様々の方法に於て、往昔幾多預言者等を経て吾人の祖先に談話し玉へり。而かも更らに時の熟せるを視て、神は其獨子キリストを以て神自からを人類に顯現し玉へり」と。苟くもクリスト教會が永存する限り、此信仰は必ず永久に續くべし何の疑ふ所か之れあらむ。

然り、然るに、茲に大に注意せねばならぬ事がある。其は他に非ず。

人類が此天啓。其天啓の方法。及び天啓の意義を領解することに就きて、動もすると誤りて眞理を晦まし信仰を擾さすべき横途に向て此天啓と云ふことを受取ること往々之れあり易きの弊害、是れ也。天啓問題の簡略論を保證せむとする所の通俗的宗教思想に於て此誤的概念極めて多しとす。

(2) 是れ天啓其者に對する問題に非ずして、而かも唯天啓と云ふことを領解する方法に就きての問題也。

(3) 聖書なる者は他に非ず。神の自啓的行動の記録即ち神の自啓的運動の史的産物、文學的産物と記録とである。聖書は天啓より生長し、且つ天啓の周圍に生長したる所の文學にして、而かも天啓と云ふことの智識を吾人に媒介する者は、實に唯此聖書である。然れども、此聖書を學ぶに就きて、其解釋の爲めに指導的原則を必要

とすることを、吾人は意識する。何となれば正當見地より入るに非ざれば、聖書其者は最も難澁にして人を悩ますべき書籍なるが故也。蓋し彼聖書中の多部分は道德的趣味、宗教的趣味、即ち天啓其者に其動力と價值とを與ふべき趣味と一つも連絡無き者の如くに見ゆる。即其載する所の多分が、信仰と行爲との緊肅的宣言に非ずして、而かも彼歴史や、地理や、傳記や、系譜や、統計や、禮拜式や、詩篇や、預言や、法談や、物語りや、譬喩や、書翰や、是等種々雑多の異性的叢書集の如く見ゆ。若し實行問題に接觸したる場合に、是等叢書集の何等の意義をも、吾人に與ふること無かるべき者の如く見ゆ。彼寺院の禮儀、偶像、崇拜、モーセ、法律の究屈なる潔齋、パリサイ徒と、サドカイ徒との彼此爭論、偶像に供へたる物の食方……凡そ是等の事件及び此に類せる陳腐なる諸問題は、彼舊約書中に充てり。吾人若し誤りて之を讀むときは、是等の諸問

題は往昔之を起し之を記したる人が既に亡びて迹無きと共に吾人の爲めに皆陳腐的死的問題たり。彼埃及若くはモアブ若くはタイルの預言的問題は吾人と何の關係か之れあらん。吾人生活の指導の爲めに要する所の實地的智慧に就きて、是等死問題は何の益か之れあらんと』此くの如く思はるる也。

吾人若し誤りて此思想線を辿り行くときは、聖書の聖書たる真髓に達する能はざるのみならず、而かも聖書も亦陳腐のみ。無價値のみ。との結論に吾人を達せしむることは、有り易きの通弊である。

(4) 夫れ吾人若し其觀察の正當點を得ざるときは、聖書の真髓を捕捉し難きのみならず、而かも、聖書其者を神的天啓として、受取ることが如何に難澁にして、且つ不可信的なる事此くの如し。故に吾人が苟くも聖書に於て、其崇高的價値を發見せむと欲せば、須らく中心的想念……

…即ち聖書全体部を統一し之を輝かすべき所の中樞的想念を求むることを必要とす。如是想念は何くにか之を求むべき乎。他無し。天啓其者の志望と其内容との『よりも良き』概念に於て之を求めざるを得ず。現在にも、將來にも、永久確乎的意義を吾人が能く彼死的問題と消的生命とに與へ得べき所の方法は唯此くの如くするに在るのみ。

第二章 基督教の天啓とは何ぞや

(1) 此問題に對する答は多多ありと雖とも、而かも其最も善く眞理を總括し且つ「キリスト」教の宏大永久なる價値を彰はせる答は他無し。曰く「キリストアンの天啓は眞に神の默示也」と云へる者即ち是也。此天啓は「神の神たること」及び「神の意志は何くに在る乎」を吾人に教ふる者にして、神の正義と神の恩寵。とが天啓に由りて知らるること。

吾人に對して神が如何に感ずる乎。吾人の爲めに神が何を爲したる乎。吾人が自己生命と生活との意義及び其死と運命とに就きて如何に考ふべき乎。亦人類相互の關係に就きて吾人は如何に考ふべき乎。吾人は其生活すべき精神に就きて如何に考ふべき乎。是等諸點を最第一に且つ根本的に吾人に語る者は即ち此天啓也。是等諸問題に對する答は即ち是れ「キリストチアン」天啓の主要を構成する者にして、「キリストチアン」教會が徹始徹終恒に之を説く所……即ち父なる神、子なる神、救世主キリストに於て、靈感的聖別的聖靈に於て、罪の赦しに於て、地球上なる神の王國に於て、永生に於て、徹頭徹尾恒に宣ぶる所の者は、此答に外ならず。是等の理想は基督教及び「キリストチアン」文明の心臓に存する者也。是等理想は古來衆多の豫言を透ほし、終に神の獨子キリストを通過して神の天啓線を歴て、茲に始めて此世界の思想と其生活

とに向て永久勢力及び確定と完全とを以て到達したる者也。

(2) 基督教天啓は記載せられて兩約聖書の中に在りと雖ども、而かも聖書即ち是れ天啓なるには非ず。天啓即是聖書なるには非ず。天啓は本來吾人をして神に就き、神の品性に就き、吾人を創造せる神の志望に就き、吾人と神との關係に就き、思考する所の某方法を以て成立する者也。故に此の方法は其内容として是等の大理想を有し、而かも吾人が必ず是等大理想と相連結してこそ始めて之に近づき之を研究し之を理解すべき者なれ。是等理想は吾人の爲めに其主要價値を構成する者也。彼「ペンタテューク」(即ち舊約聖書の首部五卷を云ふ。此五卷は所謂モーセの五書とも稱せらるゝ者也)。問題の起る如何に拘はらず、亦第二以賽亞書に關する吾人の觀察如何に拘はらず、吾人が苟くも神と人との「キリスト」教的觀察及び神人相互關係の「キリスト」教的觀察

を抱持する間は吾人は即ち「キリスチアン」たること疑ひ無く、而かも此観察に就き、吾人を助くることに於て、聖書の唯一無双の永久意義は茲に存在する者とす。宇宙間吾人が唯一無双とすべき真正至寶は唯此観察あるのみ。此観察さへ保持すれば吾人は其他の萬事萬物一切を無視して顧みる所無きも可也。若し此観察無きときは、其他何物を有するとも、亦何の効か有らん。夫れ聖書が、此観察に就きて吾人を助くる者とせば、……聖書の久長久遠なる歴史が吾人をして「神の何者たる乎」「神の意志何くに在る乎」を認識せしむる所の説明たり、實物教訓たりとせば、……其價值及び其久遠永續的意義は茲に始めて發見せられ來るべし。而かも吾人をして更らに進みて神の品性と其志望とを彌よ爾かく明白に認識し得せしむる者は聖書の外に之れ無きこと疑ひ無き事實也。此事實を既に發見するときは、則基督教が由りて

以て來れる所の上古の史的活動に於て吾人が實に神の天啓を受けつゝある者なることも亦彌よ明らか也。而かも此天啓や、之を神が造りたる所の萬物と比較するも、亦人類が曾て假託し得たる、若しくは想像し得る所の凡百思想と比較するも、徹頭徹尾其等の上に遙かに超越する者たること明らか也。

第三章 基督教天啓の價值

(1) 「キリスチアン」天啓の必要と其價值とが判定せらるゝ所以は、前章に述べたる此觀察點よりする者也。若し之に反して、彼抽象的冥想的神學に於る教理論として、若くは單に神の一默示として、之を考ふるのみなるときは、天啓なる者果して特殊且つ永遠的宗教價值を有するや否やを吾人が疑ふことも亦易し。若し此くの如き單一抽象的に理

解せらるゝときは、此事や、特別斬新なる者にも非ず、亦特別有益なることにも非ず。即ち世界古今東西總べての宗教各種をして、殆んど皆一様一如に見做されしむることを得べからむとす。此くの如き場合に在りては、上古の生活及び其文學中よりして、就中其基督以外の諸宗教典聖經なる者の中よりして、各卷に散見する倫理的教訓及び深奥なる神秘的言語を摘出し以て是等諸宗教をして基督教其者と相對峙並行する者として之を表示することも亦容易なりとす。然れども、吾人の信する所は之に異なり。吾人が、實に天啓を以て神の自啓として之を考へ、且つ其天啓の根本的理想及び中心理想と靈感とを考ふるとはき、「キリスト」教天啓は、彼他宗教に謂はゆる、天啓神示の類と彼此著るしく相異なる所あり。而かも決して濫りに相混すべさに非ざる也。故に今吾人は最第一着に此基督教天啓の深奥なる意義と其無限無量なる

價值との概念を持ち、次に進みて、吾キリスト教聖書と他の諸宗教經典との彼此大差異、及び「キリスト」と他の各宗教創立の祖師等其人との品性經歷彼此大差異に就きて概念を持つべき也。蓋し此概念を持つのは他無し左の如くなるべし。

夫れ人類が、其解答を極めて必要とする所の問題は

(イ)神の品性如何。

(ロ)吾人人類創造に於る神の志望は果して何くに在る乎。

(ハ)神と吾人との相互關係如何。

等に在り。之と同時に起りつゝある至重至要の問題は

(ニ)人類が如何に共同生活すべき乎。

(ホ)所謂生活とは是れ何者なる乎。

(ヘ)生活の意義及び生活の結果は是れ如何なる者ぞ。

等に在り。(二)の點に就きては、吾人毎日循環しつゝ意識と經驗とにより之を發見し得と雖も、其他疑問に對して、世界各宗教及び哲學の熱心的思想は古より今に至るまで終始汲々孜孜として之が解答を求めて尙ほ未だ之を得ざるに苦しみ煩悶しつゝあるに非ずや。然り而かも、如是疑問に對し、即ち基督教以外の世界幾多聖賢及び哲學者が徒つらに之を索めて獲ざるに苦しみ煩悶しつゝある所の疑問に對して、吾人が「キリストチアン」家庭の善く訓へられたる各兒童等は判然明白高尚なる解答を有するに非ずや。見よ、彼基督教以外の世界に在りては、神及び吾人と神との關係に就きて思考する正當方法……即ち神の自啓に頼りて、吾人が之を學び得たる所の正當方法……の缺乏せることを。此缺乏は彼「ヒエヅン」(Heiden) (基督教以外の宗教信徒及び總べての不信神者を稱する語)世界衰頹の大源たり。即ち「ヒエヅン」世界の

德義的迷謬。思想的迷謬の大淵源たり。其世界民族衰弱孤立及び其盲目的枯涸的思想の本源たり。此くの如き世界の不幸沈淪を救はむが爲めに最も必要とする所の者は他無し、神の福音、即ち是れ也。唯此福音こそ以て能く彼「ヒエヅン」民族の蠱惑を破るべく、以て能く彼「ヒエヅン」民族の妄想幻覺を消散驅除せしむべけれ。何となれば、彼れ「ヒエヅン」世界の民族は此くの如き蠱惑と妄想との爲めに徒づらに憂苦と鐵とに縛ばられ、以て闇黒と死の陰とに坐する者なるが故也。彼等は書籍として考へらるゝ所の聖書を要せず、唯其必要とする所は、神に就きて及び神が人類に對する志望に就きて、思考することの基督教方法に在り。即ち彼等の爲めに必要とする所は、此觀察に就きて彼等自身を助くる所の聖書に在り。

(2) 天啓を判斷することに於て、皮相的思想の世に存在する者、今尙

は頗る多し。是れより先き、宗教の比較研究が、近世に始まりしより以降、世人の多くは一方に於て、キリスト教が他の大宗教と面々相接する場合に損害を被むるべきことを希望し、他の一方に於て、之を恐怖したり。熱心なる諸學者は東方諸古國の神聖なる經籍を研究しつゝ、神が未だ曾て自から隱晦せずして、到る處に自から示現證明せることの豊富なる痕迹を其古經籍中に於て發見したりき。是に於て、彼等學生は其東方古典中に伏在せる糟粕渣滓の山堆を吾人に指示すること無くして、而かも單に其古典中より幾多の金言及玄妙なる訓言を摘集せり。此方法によりて、世人は是等東方古典が往昔夙とに智慧と宗教的達見靈識に富み且つ健全完備なる徳義的教訓の模型たることを感ずる者頗る多きに至れり。彼通俗一般の人氣に於て「亞細亞の光」と云へる如き單純なる想像的著作は此可讚的信仰の文學的再産物として行は

るゝに至れり。然るに、此くの如き東方古國他宗教の神典古典に對する、一面の希望と他一面の恐怖とは彼此共に無根的感動たるを免かれず。之に對する其一面なる學者的研究と他の一面なる其批難とは彼此孰れも偏見たるを免かれざりき。

然れども、爾後幸にして、各種東方神典經籍の翻譯が續々世に出でたる結果は是等偏見の事態を變化せしめたると共に、是等の古代隔世的信仰の研究が大に其方針を革め、安穩的着實の大氣に復しつゝあり。諸研究者にして、果して能く此方針を失はずんば、將來有益の且つ永久的結果に達し得べき也。東方古典の翻譯書に對する一般緒言中に於てマキシミユルル氏が、其研究諸家に對し誇張的空想を警ましめたる語に言へるあり。曰く

往古ブラミン教徒の「ヴェダ」經典。ゾロアストル教徒の「アウエ

スタ經。佛教徒の「トリピタカ」經。孔夫子の經書。若しくはマホ
メットの「コラン」是等の古經籍が、原始的の智慧と宗教的熱心とに富
める書籍たること、尠くとも健全且つ單純なる徳義の教訓に富める
ことを信すべく導かれたる讀者等は、實際是等書卷と親しく相接し
て之と相談するときに應に啞然として失望すべき也云々と」

又同氏は古典研究家の誇張的空想を警しめて言へるあり。曰く
東方古經典中其一方に於て、新的、自然的、單純的、美的且つ眞實に富め
ること尠かく多量なるも、亦他の一方に於て、無意義的、巧詭的、猥褻的
言語多きのみならず、而かも亦其可怖的、可斥的、醜劣なる者すらも亦
尠からず云々と。

(3) 基督教聖書と他の宗教神典經籍との比較論著は利己的即ち我
田引水の趣味を以て之を爲されたる者從來屢ばこれあり。時とし

ては「キリシチアン」天啓を崇むるとの目的を以て、一も二も無く是等東
方古經典籍を蔑視し偏見して、直ちに之を異端邪説と視做し之を棄斥
する者(甲)あり。之に反して、誇張的に東方古經典を推稱し以て吾が基督
教聖書と總べて對比し得べき崇高神聖なる者として之を崇むる者(乙)
あり。此くの如きは(甲)(乙)双者各誤まれり。何となれば、何れの宗教と
雖ども神の理想を以て其中心の理想と爲さざる者無きことの事實を
(甲)(乙)共に忘却したるが故也。是より先き(甲)(乙)各派彼此徒づらに誤謬
的爭論紛々として、爲めに其力と時とを費やしたり。即ち、キリシチア
ンは、彼天啓無くして人類が妄作し得る所の標本として宗教的迷信と
實際的憎惡との爲めにのみ古代歴史と文學とを細密に搜索せると同
時に、他の「非キリシチアン」派は基督教徒を驚擾せしめむが爲めに、自
家古典中精美なる諸訓言を集めむと圖り其古代史と文學とを細密に

搜索せり。此くの如きは(甲)(乙)兩派共に誤れり。何となれば彼古典古史中處々に散見する所の倫理的格言と不着不住なる宗教的真理とは一の宗教を造り得る者に非ず。吾人が宗教を判するや、寧ろ事物の通理に由り、即ち神(イ)なる思想。創造(ロ)なる思想。人及び其生活(ハ)なる思想。運命(ニ)なる思想。に由り。而かも宗教が充たす所の靈感(ホ)に由りて之を判せざるを得ず。此(イ)(ロ)(ハ)(ニ)(ホ)なる者は、宗教の精素にして、而かも宗教勢力の根本たり。幾多相異なる宗教制度と雖ども、其倫理的教訓は、共通的普遍的敬虔に基づける者なること多々之れあり。然れども其根本目的と根本理想とに於て彼此相殊なる間は、之をして合同一致せしめむと思ふことは、單に極端的皮相の考たるに過ぎざるべし。

彼一時一種の或る意味に於ては、宗教的感情は自から彼「ヘツチヌ」(狂

的崇拜物即ち亞弗利加蠻族が崇拜する所の木石、貝殻、或は鶏、蛇等「ト」テム「北米洲土人が崇拜する所の天然物、即ち熊、龜、鹿、狼等」の如きに附着せることありと雖ども、斯は是れ蠻族若くは半開以下の民に於て之れあるのみ。若し夫の發達せる人道に對する宗教即ち人道を發達せしむる所の宗教は、是れ完全なる人類の爲めの宗教ならざるを得ず。如何なる是れ之を完全なる人類の爲めの宗教と謂ふ乎。曰く他無し、其宗教たる、吾人の靈智(イ)意識(ロ)愛情(ハ)を満足せしむる者ならざるべからず。至崇至高の靈感を以て吾人の意志に充たす所の者ならざるべからず。此くの如き要求程度に適應せる者即ち是れ也。若し此要求程度よりも以下に位せる宗教組織は、之れ尙ほ未だ不完全たるを免かれざる者とす。

(4) 此標準本位を應用するときは、吾人は、人類の必要に對する適用

に於て、基督教組織と他宗教組織との間に彼此大に相隔たる所の廣濶の横はりつつあるを見る。上古より今に至るまで、混々滔々として止む無き長流の兩岸沙洲に横たはれる者は、是れ幾多亡滅せる古宗教の遺骸にして、是等古宗教が、死的亡的と爲りたる所以は、他無し、社會靈智の發達と共に其歩調を整へて進む能はざるを以て也。彼亞細亞的諸宗教が、其既に亡びたりし遺骸を吾人眼前に横へつつある所以は、其原因是に存する者多し。即ち彼等古宗教に包含せる所の眞理は、其外套即ち兒戲的、痴鈍。及び癡癡的外套を以て封卷せられて之が爲めに窒息以て死に至るを常とせり。詳く之を言へば、彼等は意識との關係に於て最惡状態に居れり。神の思想を瀆がし卑劣を耻とせず。彼等は創造に就きて一つも崇高なる倫理的志望を發見せずして、而かも唯彼正當結果も無き空漠不確の起止動靜を發見するのみ。彼洪大なる印

度宗教が人類最高希望として人類の爲めに持する所の者は他無し、唯人類をして佛化若くは涅槃に由りて以て現世生存を解脱せしむるの一事に在るのみ。キリスト教の感識に於る……天父(い)世界に對する神的意志(る)神的救拯者が舉行する所の神的救拯(は)人類靈魂を義に導き且つ其善を完ふせしむる所の恒在的聖靈(に)信的靈魂が恒に神を崇め且つ之を讚美する所の永生(は)是等に就きては、彼等印度古宗教は一つも之を暗示すること無し。之に反して、彼等古宗教の大希望は、吾人生命其者を目して之を敵と爲し、之を重軛重擔と爲し、寧ろ速かに此世を棄て、其身を捨てて以て其所謂敵と重軛とを避くるに在り。故に神的觀に於て、世界觀に於て、人生觀に於て、彼等印度の古宗教は吾人の基督教と彼此全く相反對たり。

然るに、彼等古宗教經典中の各處に偶々散在せる所の德義的格言及

び宗教的内觀の奇發的閃光あるが故を以て、人或は此種の格言と閃光とに眩せられ之が爲めに基督教を誤認して印度古宗教と大同的と視做し、基督教は其實一つも新的且つ特殊崇高貴重的價値を有せざる者也とまで思惟する者多きは、是れ實に淺見皮相のみ。此くの如き淺見皮相は次に吾人が述ぶる所の諸宗教組織の中心的想念と中心的靈感とに照すときは直ちに判然明白なるに至らむとす。願ふに、方今吾人の間に在りて亞細亞的宗教を崇拜する所の一派あり。其派の人等が其古宗教の使徒として行動を世に始むる以前に於て、先づ第一に是等想念を修得することに就きて幾多痛苦辛艱に遭ふべきは、吾人が豫かしめ期する所也。蓋し彼印度教若くは佛教若くは孔子教を理會せむと欲せば宜しく其根本的想念と其が造り成せる文明を研究せざるべからず。此くの如き根本的想念と其が造成せる文明の諸結實とに由

りて、吾人は始めて彼等古宗教の要領を識り得べき也。

(5) 非基督教的諸宗教が可及的高尙なる者として發見さるゝことの欲望に對して、吾人は滿腔十分の同情を抱きつゝある者也。彼諸宗教大會議を開くと云ふことに對しても亦若し其會議をして曖昧なることさへ無くんば、……即ち一般常套語柄の蔭に事實を隠蔽すること無く且つ其會議をして彼廣告的「ハービー」(鳥身女顔の一怪物にして、我國俚語に所謂鶴の類也)の汚辱的觸接を避くることを得せしめむには、吾人は一も之に故障する所無し。

夫れ世界に來る所の各人類を照す光明の玆に在ることを聖書が吾人に訓ふる如く、到る處人類の間に於て神の遍在と其靈感との踪跡を發見することは「キリストチアン」たる者誰れか之を喜ばざらんや。若し之を喜ばざる者あらむには、是れ悖戾のみ。誤謬のみ。蓋し人類に對

する神の志望中に「ノン、クリスチアン」即ち非基督教的諸大組織が其一地位を占めたることは、「キリシチアン」の爲めにも、信神家の爲めにも、明白認められざるを得ず。然れども、此一地位を占めたることを云ふ事は、是れ其古宗教組織が完全或は完了したると云ふ意味には非ず。見よ、彼猶太教は單に始めありしのみにして、而かも其終りを有せず、彼にして「よりも博宏なる」基督教の思想中に混入融化せらるゝに非ざりせば、一の失敗に歸すべかりしを。其他の古宗教も亦然り、其最も善き者すらも、亦各其一時限りの者たるに止まりたりき。然る所以の者は他無し、彼等古宗教組織は人類をして完全ならしむるを得ず。亦人類を建造して至善状態に立たしむることを得ざりき。彼等は人類を黒くすべきの權能も無く、亦之を淨洗して白くすべき權能をも有せざりき。博愛と同情とが彼等の爲めに眞正に語り得る所によれば、彼等古代の

形体は其比較的至善至潔なりしと雖ども、其後大に衰頹して復た回復する能はず、結局彼等は己れ自からをも他人をも救ふべき權力を有せず。吾人は將さに謂はむとす、曰く、彼古代印度人は當時神に向て發程せり。彼等の宗教的文學は實に彼等自身が神國を尋ね求めて神路に向へる旅行の記録たり。然れども、印度「バンテオン」(衆神合祭の殿堂)及び印度通俗宗教を審察して其可憎的諸事狀を考ふるときは、彼等か悲慘的に其旅行の進路を誤りたることを、吾人は認めざるを得ず。即ち彼印度社會の邪曲的麻痺的汚辱的勢力が印度宗教に於て自から集中せられ且つ化身せられたることは、昭々として掩ふべからず。之を要するに、結果其者は最終の證明也。彼亞細亞は過去に在りても現在に於ても、亞細亞的諸宗教の罪案を審判するに十分の證憑たること明らか也。

(6) 隔世の古宗教的組織が、其中には今日普通に注視せらるゝ所の一般良性善質を有てりとの故を以て、他の一方に於る多罪的事實を漫然看漏らすべきに非ず。前章にも既に述べたる如く、吾人若し誤りて彼抽象を過度に齎らし込むときは、總べての諸宗教を一切同如し視せられしむるに至ることを得べし。隨て各宗教が其奥底に於て神を信することを見出すことを得べく、隨て各宗教共に、其根の又根に於て、奥の又奥に於ては彼も此も何の異なる所無しとまで結論し得べし。然れども、此くの如き發見及び結論は單に口舌的幻想たり妄想たり。而かも、神の概念(イ)神の志望(ロ)吾人人類と神との關係(ハ)此(イ)(ロ)(ハ)三大綱が、世界古今各殊の宗教組織に於て、彼此非常大差懸隔を顯はしつゝあることの事實は確乎として搖かざるや明か也。彼口舌的幻想妄想は豈に此事實を搖かすに足らんや。

又彼曖昧なる「ヂウアイン、インマンチヌ」(神が吾人の衷に在ること)の勢力に頼るときは、一切宗教孰れに於ても神が必ず自から默示したる者なることを吾人は斷言し得べしと雖ども、而かも、若し各種各様の天啓默示を把りて之を同一平面に措くべきことを吾人が思ふに非ずんば、……且つ宗想的思想と活動と其發達とに於る人類勢力なる者を強て無視するに非ずんば、……吾人は此くの如き萬教混視の論を以て一つも獲る所無かるべし。苟くも宗教界思想家にして、或る倫理的內觀を自得したる者は、彼多數異教の粗大なる不徳と腐敗的劣惡とを看破しながら、之をしも神的品性意志の天啓として觀ることを欲せざるべきや必せり。是等不徳義と劣惡とが除き去られさへすれば、彼異教諸組織中にも亦必ず天啓默示あるべきこと。而かも其默示は適用と完備との程度に於て、彼此差別あることを吾人は認許する者也。

其れ然り此に於て吾人は彼此各般の諸天啓默示中其孰れか最も善く吾人を齎らして神に近く到達せしむる乎。其孰れか善く吾人に與ふるに神觀人生觀の最高思想を以てし、神人相關の最高思想を以てし、人類創造に於る神的志望の最高思想を以てする乎。人生に向て最高最多効的靈感を給する乎を研究せざるを得ず。

(7) 果して能く此方針に従て進行せば本題は自から解釋せらるべし。他無し彼基督教以外の諸宗教が神的なることを吾人が思惟し得るにもせよ而かも基督教は其等よりも更らに多く神的たること明らかなるが故也。彼等諸宗教が古代人類生活の粗野且つ瘴猛なる各行程階段に於て行ひたりし所の任務の多大なること勿論なるにもせよ、彼等古宗教は人類若くは社會をして完全ならしむること能はず、人類若くは社會を構造して至善の地位に達せしむること能はざりき。

吾人社會に於る佛教孔教の眞摯篤實なる尊敬者連中が之を尊敬讚美するは固とより可也と雖ども而かも其過度に陥ひりつゝあるは誤まり。彼連中は果して彼佛教或は孔教に由りて發達し且つ其宗教組織に由りて管理せらるる所の社會に於て躬親から生活することを欲する乎。否恐らくは然らざらん。何となれば彼佛や儒や皆古代人類の智徳尙ほ極めて幼稚なりし時代の宗教に外ならず。若し心理的徳義的性質が發達するときは自己智徳の満足歸依服従を要求し得る宗教を吾人は需用せざるを得ず。彼等佛教孔教の如きは此くの如き吾人智徳の満足歸依服従を要求するの資格ある者に非ざるが故也。

既に指示せる如く(本章第三節)發達的人道の爲めの宗教而かも人道を發達せしむる能力ある宗教は人類の全性即ち………靈智(イ)意識(ロ)愛情(ハ)を満足せしむる者あらざるべからず。而かも最高目的と最

高靈とを以て吾人の意志を充たす者ならざるべからず。其れ然り、吾人は、彼基督教以外諸宗教に對して善意的好意的たると共に彼等諸教中に存在する所の若干善處を認むることを悦ぶと雖も、其故を以て、彼等諸教の不完全と其實際的無效力とを看漏すべきに非ず。而かも究竟彼等よりも善き者を以て將來彼等に代はらしむることの必要を吾人は決して看漏すべきに非ず。

(8) 吾人若し彼古宗教と吾基督教とを比較するときは、基督教が遙かに優れることは一一枚舉に遑まあらず。然れども、自然の天啓と基督教とを比較するときは、其彼此均等なることを吾人は感ずる者也。「キリストチア」諸國に在る「アンチキリストチア」冥想法は此天啓を極力主張することに慣ひ、此天啓なる者は吾人が要求する所の光明一切を吾人に與ふる者たることを切言するを常とせり。願ふに、天啓なる

者が、或は自然に於て、或は意志に於て、或は歴史に於て、各處各時に之あることは、是れ賢明なる「クリスチア」が欣然として之を認め且つ確く之を把持する所也と雖も、而かも、此天啓あるが故を以て、何も彼も皆之を天啓にのみ任せ、自分欲望する所の一切を吾人が拋棄し得る程までに爾かく天啓が完全適應なるや否やは未だ明白ならず。基督教的思想が盛行する所の基督教的社會に於て、彼一種の哲學家がキリスト教外に自から學べる所の一種の信仰を抱きつゝ、巧みに之に附會するに其れ相當の惡的理由を以てし、而かも彼自から之を演繹したることを巧みに論結し得る者、往々之れあり。此くの如きは是れ幻覺のみ。妄想のみ。假令ひ、其は彼冥想的眞理の爲めに發せる者なるにもせよ、是れ彼回想的能力の可能線内に在る所の一種幻想たるに過ぎざる也。

夫れ神の唯一なること。及び其教理、即ち之れ無くんば彼合理的科

學が亡ぶべきこと必然なるべき教理は、唯此基督教の勢力效能に頼りて以て吾人人類に到達したる者實に多きに居る。彼哲學其者は、此勢力效能に追隨して以て該教理の爲めに、諸般道理を發見したる者也。然れども、教理其者は主として基督教教導の力に頼り近世世界の意志に到達したる者にして、即ち該教理をして、近世的思想の確定的傳説と爲り確定的領地と爲らしめたる者は、主として基督教教導の力也。

(9) 神的品性及び神的志望に就きては、彼自然の默示は頗る疑的を免かれず。自然の默示に對する信用は近年漸く減じて、而かも彼熱烈なる懷疑家は之を侮り、或は之を揶揄すに怒的嘲笑を以てするに至れることは是れ吾人が方さに遭ふ所の困難也。彼權威の默示若くは熟練の默示、其れのみにては、宗教の爲めに一つも基礎を固むるに足らず。吾人が其他に切要とする所の者は、德的品性と德義的志望との默

示に在り。彼自然の默示なる者は曖昧且つ缺點多きを免かれずして、而かも其曖昧なる且つ缺點多き事實が感ぜられたること、目今に於る如く爾かく鋭敏なることは、是れより先き未だ曾て之れあらず。

蓋し此世界の過去の樂天主義及び純樸的^{ナイヴ}神人^{アンソロポモルフィック}同性論的^{インテリゲンシヤ}解説は今や彌よ困難を加へつゝあり。智識の上進は是れより先き吾人が合理的に解釋し能はざりし所の諸弊害の狀態及び其多々なる禍害の狀態を顯露せしめたり。茲に吾人は自然の強奪^{レイヴェン}と其暴掠^{ラビーン}とを考へ亦諸事物の判然と無意味なる狀態を考へ、及び太古火燄^{レリツエン}と火山熔岩^{ラバ}と燃滓^{ラッシュ}とが尙ほ此地球表面に充滿填塞せしときの長期時代を追考するときは、當時彼蠢々たる劣等生活の諸物体にして、其意義を有する者の如何に僅少なりし乎。吾人之を想ふ毎に深く驚愕し、而かも當時是等諸事物が如何の狀態に在りたる乎。を想像せざるを得ず。當時の人類

歴史は逸として知るべからず。當時人類の大部分は尙ほ未だ一つも其歴史を有せずして、而かも其有せる所は、單に彼最も不満足最も缺乏的なる動物的必要と切需とありしのみ。當時許多の種族が地球の局部局に散在隔離しつゝ、其終始止むこと無き争闘。其相互の屠殺は頻々として、瘴、猛多難なる問題を充たしめたりき。此くの如き盲目慘憺たる艸昧時代クワに當り、其間僅かに幼稚なる開化の最初程に辛ふじて攀ぢ登れる所の最少數種族は其衣食住と自衛との負擔が僅かに加重過大を覺ゆると同時に、自から之に堪ふる能はずして、脆くも忽ち之が爲めに倦屈疲困するを常としたりき。

(10) 若し吾人が、有機的及び無機的一般自然の諸形体を考へ且つ歴史上一般事實を考ふるときは、其意義如何に就きて、茲に大不確定を感ぜざるを得ず。若し亦個人の生活を觀るときに、吾人は、前者よりも好

く感ずることを得ず。何となれば、吾人人生の一般形体は其身体的及び血氣的特秀を具有しながら多誤多躓の塊物たるを以て也。堂々たる靈性的生物が頭を俯して動物的必要に全く従屬しつゝあることに於て殆んど奇怪なる『サムシング』が茲に存在する者の如し。是に於て吾人は自分の生活と其命數との不確定に注目し、其健康と幸福との彷彿たる不慮事變に注目し、吾人自から之を奈何ともし難き多々の成敗利鈍に注目し、彼宇宙自然が盲目的運命若くは盲目的奇運……即ち人類を弄ぶ所の盲目的運命及び吾人の最良計畫が或は妨げられ或は失敗に歸せしめらる所の盲目的奇運……なる者の感識を以て人類を逼從せしむる事物に注意しつゝあり。

(11) 茫々たる天地何處何邊を回望するも、此大宇宙の秩序が果して一切可知的に確乎と行働しつゝあることは些しも見るを得べからず。

少なくとも、或る徳義的課業に於て働らきつゝあることは些しも見るを得べからず。然れども是等の事實は神的智慧と神的善とに相矛盾すべくもあらず。然れば、是等事實に關する吾人解釋の困難は、吾人固有の無學の影にてこそあれ。是等事實は敢て智慧をも指さず、亦善をも指すに非ず。吾人淺慮なる樂天主義の故を以て、是等事實を一般に解識する能はして、漠然と無學に之を看過し、若くは吾人が單に基督教教的教訓の見地よりは、是等事實を觀るの故を以て自から困難を招けるなり。其結果吾人は、是等事實の純粹論理的研究に伴ふ所の恐怖驚慌の感動に堪ふる能はざるに至る。彼『キリストチア』にして、其信仰を棄てたる幾多人人の熱摯的意志を圍める所の悲觀厭世主義は、即ち此くの如き者也とす。

(12) 『何人も皆永生の言語を有すと雖も、獨り彼科學と哲學とは之

を有せず』と云へることは、終に定義とせられたり。故に愛と信とに必要なる神の概念は、彼科學哲學の外に於て之を求めざるを得ず。レッシング氏が愛尙せる思想にして、且つ氏が屢ば反復叮嚀に之を唱へたる思想は、以爲らく……『天啓の必要は時代と共に過ぎ去るべし。何となれば、理性は一切宗教真理の合理的地盤に透徹して、其固有權を以て終に確乎と建立すべきが故也』……然れども、此思想に對して、吾人が疑ふべき處二つあり。第一には、基督教の根本的諸要素は、單に回想を以て發見せらるべき合理的真理のみに非ずして、而かも亦主として證據に由りて學ぶべき事實なるが故也。即ち神の善と正義、及び『人類に對する神の恩寵的志望』なる者は、單に洞觀のみを以て解すべからざる者なるのみならず、唯之を神の言行に詢ふことに由りてのみ能く解答され得べき事實の諸問題なるが故也。第二に、若し人の心意

なる者が、其地球上生存中に在りて宇宙に於る神法の完全満足なる解釋に達し得べきや否や是れ極めて可疑的たるを以て也。此神法の神秘にして且つ不可測なることは彌よ彰明較著を加へつゝあり。『神の諸大道は吾人道路の如き爾く短狭なる者に非ず』、『神の諸思想は吾人思想の如き、淺薄なる者に非ず』との感動は彌よ其深きを加へつゝあり。蓋し吾人知識の發達生長よりも、此問題の生長擴大は彌よ速かなり。而かも此畏敬すべき神の信仰と信頼との爲めに、吾人が、エスキリストに於て神の歴史的啓を必要とすること、従前よりも更らに多大を加へつゝあり。吾人は其自から理解する神を有するに非ずして、而かも未だ理解せざる前に先づ以て之に信頼し得る所の神を茲に有せり。吾人が此人生と世界とを冥想默思することに於て深く感ずる所の理性的困難の多くを基督教が全く除き得たりとは、吾人敢て思惟せ

ずと雖ども、神の天啓に由りて、基督教が此困難の翼さを縮め得たることを認む。其天啓は神の途の神秘なるにも拘はらず、吾人をして神に信頼し神を愛することを可能的ならしめ、即ち一切善事の安全進行向上活動しつゝあることを吾人に保證する所の者也とす。詩に曰はすや、……

『萬般善事の進行向上は、誰れか遮る者あらん。』

墓も隔てじ。荒墟も沮まじ。壞物如何に堆積するとも、

争かでか善事を妨げん』、『嗚呼彌や増る其能力もて、』

神邊に向て 永久に 進め。』

(13) 基督教天啓は、倫理若くは冥想的神學の兩範圍に對して、『サムシング』を働らきたりと雖ども、而かも該天啓の大重要點は此兩範圍に寄與せる助力に在らずして、『よりも根本的』即ち吾人生活の神秘と不

確定とを退かしめ、多くの歴史の判然たる無目的を退かしめ、許多の敵と恐怖とを退かしめ、而かも神及び絶對權威ある人類の友(キリスト)人類の愛者(キリスト)重荷負擔者の首領(キリスト)献身犠牲に於る萬人の主導者(キリスト)を啓示することに在り。沸々たる混沌の上、に聖靈の神は方さに巢籠れり。而かも永遠より永遠に至るまで聖約と光りとの一、大弓は方さに其處に緊張しつゝあり。

(14) 基督教の天啓……即ち神の默示、神の義、神の愛、及び神の恩寵的行動……は此くの如し。詩句に言はずや、曰く……

『吾が總べての生涯の源泉の光明よ。』

吾が觀る總べての中の最上の光明よ。』

(15) 人類の智徳養成向上及び神の王國を來らすことを遂ぐる所の一切博愛的勢力と靈感的勢力との頭首を占むる靈性的大勢力は實に

此基督教天啓也。若し吾人が「サムシング」を識らむと欲せば、須らく自然に向て之を索むべく、若くは之を精神學に索むべし。然れども、若し吾人が、「神とは何ぞや」「人類に對する神の意義如何」を知らむと欲せば、吾人は宜しく直ちに來りて基督教天啓に就かざるべからず。即ち吾人が能く適當に神啓默示せられたる天父を發見する所の門戶は唯此に在るのみ。

(16) 然れども、吾人は誤りて此天啓を適當に貴重することを怠たる場合屢ば之れ有り。或は天啓を理解することに於て他の誤的諸概念の爲めに、無用徒勞の困難に自から罹ること屢ば之れあり。請ふ次段に於て之を考へむ。

(17) 夫れ此世界は其れをして完全なる智慧と善との行動に充たされしめむこと、是れ吾人が切望する所也と雖ども、實際世界は吾人の豫

期と極めて異なるが故に、神の默示天啓も亦其方法と機械とに於て、吾人の豫期と極めて相異なる者多し。而かも吾人の天啓に於るや、種々豫納的總念を以て之を研究するを常とするが故に、其結果是等總念は、インテリゲンツイット豫納的總念が物理的科學に證明せられたるよりも多くの失敗を聖書研究に於て顯はしたり。蓋し、抽象的方法に於て「天啓とは果して何者ならざるを得ず」と云ふことを決定するは極めて易しと雖ども然らば其天啓なる者は現實如何に有る乎」と云ふ事實を確かむるに當りて、抽象的決定は、其要領を得難きこと屢ば之れ有り。何等試験法が之を示明すべき乎を究むることは、吾人の今敢て欲する所に非ずと雖ども、吾人は、唯其「天啓は果して何者ならざるを得ず」と云へる豫納的總念と若干一致の點にまで現實天啓を換るべく確く之を執る者也。

(18) 天啓に對する最單純最明瞭なる總念は他無し、天啓と聖書とを

同一視し、之を以て神の親言と爲す者は是れ也。此概念を勸むることに於て、彼歴史的及び聖書註釋學的種々の道理は相連合せり。乃ち其神言が重ねて靈感に由りて人類に授けられ、且つ筆記せられたる者として、容易に思惟せられたり。此くの如く口授筆記せられたる事物が、更らに淨寫し編輯せられて單一書卷と爲り而かも一冊の完全無謬的神言と爲りたる者は、是れ即ち聖書也。如是總念は最低的理解の水平線に在る者にして、聖書の熟語の多大數は此總念内に転やすく收用借用せられつゝあり。如是概念によれば、聖書中に在る萬事は皆神撰神作として完全無缺として、之を豫期すべきは固より自然たり。隨て其無謬インテリゲンツイットは自然の結果たり。若し聖書中に誤謬あることを許すことは、是れ即ち聖書全般を棄るに均しとせられたりき。是より先き多年の間、無謬論の盛むなりし際に當り、聖書の用語すらも一切完全なることを主張

せられ、新約全書の希臘語が最高文學に非すと云へる暗示は是れ亦異端に劣らざる邪説として、憎惡せられたりき。蓋し彼希臘能文學者が普通人類としてすらも、聖書を記録し得たる者とすれば、況んや聖靈に於てをや。當時此くの如き概念に於て聖靈が之を記録し能はざりし者とは、思はるべくもあらざりし也。

(19) 此口授筆記的聖書の内容は、通俗神學的思想を常に支配し、且つ明白なる理論を支配したる者なりき。顧ふに、歴史を透ほし、社會の徳義的生活を透ほし、神的人類の洞觀を透ほし、天啓の綜合は比較的困難且つ不確たり。神の默示が何處に將た何様に來るべき乎。を視ることとは容易に非ず、神よりする天啓と人よりする天啓とを如何に區別すべき乎を視ることは容易に非ず。亦天啓は此くの如き疑定的法式に限ることを容れず。而かも天啓は教義的建設に於て、就中、教義的獅

子吼キリヤンに於て輒やすく用ひらるべき者に非ず。他の一方に於て、天啓と云ふことの形式的言辭の説明は確固たり、其説明は容易にして、且つ那處に之を運般應用するにも難からず。而かも之に冠するに、……『主は斯く言へり』……なる一句を以てするとき、彼反對者の萬軍をして、爲めに辟易退走せしむべし。其れ然り。然れども、此概念は誤解たり。此天啓概念に於る吾人困難の大部分は、他無し、其暗示的表現と明示的表現とに在り。此事を明らかにせむが爲めに、吾人は靈感其者に就きて更らに一言を左に述べざるを得ず。

第四章 聖書は其れ靈感乎將た口授乎

(1) 聖書が靈感の産物たることは、教會の確信たり。聖書中の各記者は未だ曾て自己の設計若しくは自己理會の盲索臆斷に任せて之を

述べたる者あらず。彼等は聖靈に勵まされて其聖靈の活力に頼りて以て之を語り之を記せるに外ならず。舊新兩約書中の各書を研究すれば此事彌よ明白也。而かも他の神聖的古經典と之を比較するときは、此事彌よ益す明瞭也とす。此神的勢力と其指導とは之を既往に比較すれば、今や彌よ明白を加ふ。何となれば此問題解決の如何に困難なる乎を吾人が今や益す明らかに視るを以て也。彼他の衆記者が粗野なる世界創造論と空想的科學と幻怪的梦想とに於て、彼れ自から失敗しつゝある間に於て、獨り吾が聖書記者は、此諸點に就きて最非常特殊なる靜肅ソリタリスを善く保ちたりき。故に聖書記者が偶ま陥りたる所の誤點あるは總べての場合に於て、比較的僅少にして、而かも該記者が特に目的としたる所の神の天啓を未だ曾て敗らざりき。此點に於て『スクリプチュアス』即ち聖書の無双なる性格は他民族（印度其他古

代諸民族）の諸經典バイブルスと比較するときには吾兩約聖書は、唯一無双の價値ある者とす。

(2) 是に由りて之を觀れば、吾人は聖書が靈感的天啓せられたる者なることを言ふを得べし。詳しく言へば、聖書は人類が聖靈に頼りて動かされ且つ開發せられて、之を記述したる者是也と謂ふことを得べし。然れども、吾人が斯く云へば、逆、各聖書其者が必ずしも無謬的智能を以て記述せられたる者也とまで謂ふことを意味するには非ざる也。蓋し彼靈感天啓の現在と云ふことは、其産物の如何に拘はらずと雖ども、靈感天啓其者の意味と其尺度とは、單に彼抽象的回想に由りて之を定むべき者に非ずして、而かも唯其天啓の結果如何の研究に由りて以て定めらるべき者とす。『天啓とは何ぞや』と云ふことを解く前に須らく先づ『天啓は果して何を爲す乎』と云ふことを辨識せざるべか

らず。善く之を識るときは前問は隨て自から解得せらるべし。願ふに、吾人は天啓の純的性質を推究し得べき先天的概念を有せざるが故に天啓其者が恒ねに同一事件を意味する者也と言ふことを得ず。何となれば、天啓なる者は多多深淺高低の相異なる階級程度を有し得る者なるが故也。例へば彼以士帖エズラの書を記する爲めに必要なる天啓の程度は、以賽亞エザヤの豫言若くはパウロパウロ的諸書翰を記する爲めに必要なる天啓と比較するとき、彼此極めて相異となるべきが如き、即ち是也。故に吾人は天啓に由りて以て其書の性格如何を決すべきに非ずして、而かも寧ろ其書に由りて以て天啓の性質高低精粗如何を判定せざるべからず。

(3) 疑者將た必ず問はむ、「口授無くして何を以て天啓あるを得る乎」と。此疑問に對して神學的解答無きは勿論とす。蓋し人類相互の

間に在りてすらも、甲人意力が乙人丙人に及ぼす所の効力は神秘たり。而かも況んや人類精神に及ぼす所の神の勢力に於てをや。吾人は唯能く自己經驗の推論比考の援助を借りて以て此神秘を解かむのみ。見よ彼學校教場に於る、教師は十分現實の識覺に於て能く其生徒を感啓せしめ、又彼哲學者は能く其門生を感啓せしむることを。此場合に在りて、其生徒や門生や彼自らの學力は依然として同境同程に留まりながら、而かも其未だ達し得ざるべき所の洞觀に超達し得る者とす。此事たる、如何にして、彼等が之を感啓せしめたる乎は、吾人之を語る能はずと雖ども、而かも其事實は普通なり。之と均しく、彼説教家が若し或る特殊の洞觀、若くは深き精神的熱心に達する場合には、彼は靈啓せられたる者として稱せらるゝと毎々之れあり。是等の場合に於て、其靈啓靈感は正さに現實なりと雖ども、是れ其人をして自己以上なる一

勢力權威の器具と爲らしめたるが故に非ずして、寧ろ其人自身をして「よりも高き」權力に昇達せしむる場合也とす。此くの如きは是れ靈啓にして、而かも口授には非ず。聖書の靈啓に就きて、吾人が思はざるべからざる所の比考推論と相一致する者は即ち是也。神は聖書を口授せずして、而かも之を靈啓せり。故に聖書の各記述者は、一面に於ては、依然たる彼れ常人自身なりしと雖ども、他の一面に於ては、到底自力に及ばざる所の崇高的洞觀に超達したりしこと彼れが如くなりし也。

(4) 上段の解釋は尙ほ極めて緩漫にして、而かも靈啓に關する此くの如き概念は彼曖昧なる通俗的言談の爲めにするだけならば、是にても亦可なりと雖ども、天啓の本源に對しては、甚だ不確定なりとは、方今世人の共に謂ふ所也。然り。此解釋は今一層を進めざるべからず。即ち尙ほ一層定まりたる且つ實業的なること、及び科學的定義に於て

之を定められむことを必要とす。而かも此要求を充たすべき解釋は究竟聖書無謬的の綜念……口授的綜念に於て之を發見せられざるを得ず。

(5) 此口授の綜念は十分明白なる唯一無双の概念たること疑ひ無し。此以外の諸概念は隱晦にして不定に陥り、而かも硬難なる定義に固着せらるゝことを肯むせず。然れども、此口授の綜念なる者も亦之を兩約聖書中の所謂「キアノン」(教會に於て、信仰標準として、兩約書中より特に之を撰み之を特別崇信する所の諸書を「キアノン」と云ふ)に應用するときには絶對的不可保たることも亦疑を容れず。試みに視よ、彼預言者若くは使徒に示されたる主の聖言にして、之を筆記すべく命せられたる所の篇章の文字的眞理を吾人が認許するとせむには、此は是れ彼舊新兩約各書悉皆口授と云へる舊來博說的概念を建定する

ことと直ちに矛盾するや明らかなるを。視よ、以賽亞に對する主の言として一種預言的異象(神啓)が、イザイアに啓示されたることは、吾人之を信ずるを得べきは勿論なりと雖も、而かも之に反して、彼列王紀略、歴代志略の諸書イステック以士帖及びルツ記の諸書の如き者が、聖靈の口授に由りて記されたりと云ふことは、極めて信用に乏しとす。何となれば、是等の諸書を口授とする主張とイザイア書の事實とは彼此大に相懸隔せる者にして、而かも之を混視すべきに非ざるを以て也。然るに彼傳説的神學家等が之を固執する所の口授の教理は從來彼「キアノン」全体に適用せらるると雖も、其は是れ根も無き薄弱なる教理のみ。聖書自身は未だ曾て此くの如き主張要求を爲さず、亦此くの如き主張を保證したることあらざる也。然るに、彼傳説的神學家が、世界億兆人類をして、聖書中幾多の談者と記者との各般發言の現實作者は皆聖靈也

と云ふことを納得せしめんとするの企ては寔に妄誕無稽の極に非ずして何ぞや。顧ふに、彼等自身が之を語り之を記するや明白也と雖も、而かも之を後世より粉飾して聖靈が親しく語れる所の筆記として之を思ふときは、徒づらに視る者をして、混雜と不利益とを覺へしむるのみ。彼口授の綜合が此くの如き混惑に陥ること固より必然避くべからず。而かも此綜合を拋棄する場合に於て其以外に、更らに吾人が當さに取るべきの綜合は何くに在る乎」と察すれば、「よりも曖昧なる」而かも「よりも扱ひ易き者」あるのみ。

(6) 茲に靈啓に於る緊要元素にして、上來未だ陳べられざる者、尙ほ一つあり。他無し、「無謬性」インポズリビリティ即ち是れ也。彼口授の緊要とせらるる所以は他に非ず。唯此無謬性を保續するが爲めのみ。故に此無謬性が能く保續せらるる場合に在りては彼口授なる者は別に之を主張する

の要無き也。然れども、此無謬性が放棄せらるる場合に至りては、吾人は靈啓其者をも亦拋棄し得べからむとす。

(7) 抽象的に考ふるときは、是れ既に結論なる者の如し。然るに、致謬的指導は之れ有れども、無きが如きのみならず、寧ろ其無きよりも尙ほ悪きが故に、吾人は聖書の無謬的主義を維持することの假定的必要に就きて、將さに之を次に述べむとす。

第五章 聖書ノ無謬

(1) 此問題を抽象的に論せむには、吾人は此教理の必要の爲めに、強なる例據の擧ぐることを得べし。即ち此教理が神的根源に包含さるることをも言ひ得べし。若くは此教理若し無きならば、吾人は總べて大洋に漂ふべく、而かも一つも天啓を解する能はざるべしとまでも

言ふことを得べき也。然れども、吾人は、此くの如き推理を強行することに於て、極めて縝密注意を要す。何となれば、其推理が若し剛正健全なるときは、其推理の結果は必ずや總べての信仰を顛倒せしむるのみなるが故也。彼聖書は、其原文にもせよ、亦其翻譯文にもせよ、無謬無誤の聖書と云ふ者は、現今吾人が一つも之を有せざるを以て也。彼單に抽象的推理にのみ基つきて偏へに聖書無謬を固執主張する所の人等をして、若し其狹隘なる密室を出でて、古今手筆寫本の情態、及び其古今各代に於る各翻譯の精粗巧拙、區々不齊なることを熟考審察せしめよ。而かも其考察の結果、彼聖書其者の無謬を嚴格に唱ひ且つ之を主張することとは、是れ全く架空的妄想臆説たることを自から覺るべきや必せり。若し其人等が、聖書の歴史的無謬を主張固執するならば、彼歴代志略と列王紀略とをして、其同一記談を彼此共に明白正密に語らしむる

までの間其人等をして姑らく其固執主張を中止せしめよ。

(2) 此種の熟考審察は多數の人人を導きて其迷夢を覺破せしめ、即ち現存聖書に對する『無謬』の主張を抛棄せしめたると同時に、其無謬と云ふことの主張を單に『ある原始的手寫』の部冊に限らしむることと爲りたりき。然れども『無謬』と云ふことが、果して實際上緊要の事なりとせば、此くの如き姑息の地位は吾人を満足せしむるに足らざる也。何となれば、現存聖書の手筆彩本及び其翻譯本は共に無謬的には非すとせば、彼既に亡び既に逸散せる聖書の無謬なることに就きて、吾人は果して何等の利益を受くべき乎。他無し是に由りて以て神的眞理を吾人が救ひ得たることを假想し得るに止まるのみ。而かも實際上目的の爲めには依然として、不幸の地位に居る者也。

(3) 若し吾人が、一方に於て、僅かに古代より傳はり來れる無無的寫

本聖書の一部を有するにもせよ、他の一方に於て、確たる他の無謬的聖書の存する無くんば、彼些少の寫本が將た何程の用をか爲さんや。若し又無謬が果して必要ならむには、吾人は何爲れぞ單に古代古語を復活せしむることを必要とするのみならず、尙ほ又思想と感情とも亦併せし古代の方法組織を復活せしむることを必要とせざる乎。吾人の聖書翻譯が此くの如き復活を爲すに非ずんば、吾人は依然として、尙ほ誤謬に罹りつつあるべき者也。且つ古代の言語が精密適當なる近世的意味に於て復生せらるることも、其をして善く理解せられしむる必要ありとせむに、假令ひ聖書無謬說に一致する人と雖ども、其通譯に於ては十分不同を來たすべし。然る所以の實例は彼神學の過去と現在とに徴して明らか也。何となれば、國語其者の性質が彼硬澁なる目的の通譯と爲ることは必ず不能なるを以て也。凡べて精神的關係に應

用する諸語の必至形而上的性質は皆此途を障碍するを例とす。

(4) 其れ然り。故に吾人が當初出發せし所の原始的無謬説なる者は、一般翻譯の不確と、國語其者の不確且つ神學者連の争闘とに由りて其れ自から消散せり。彼最頑硬なる無謬的教理の爲めに吾人が困難するよりも寧ろ有謬説の可許的認容を爲すことの弊妙きに如かざる也。彼無謬的教理の維持には聖書研究と神學史との不可拒的事實の前に立ちて彼等の觀察が是まで吾人の爲めに果して何を爲したる乎。將た向後果して何を成し得る乎を吾人に證せざるべからず。之と同時に、彼等は彼原始的寫本の聖書が既に亡びたることに就きて、吾人に證せざるべからざるの地位に在る者也。

(5) 論者或は曰はむ。『吾人は一つも天啓を有せず、聖書に對する觀察は各人各其好む如く自由たり。何となれば聖書中其不可掩的誤謬

を認許するの結果は此くの如くならざるを得ず』云云……と。吾人は以爲らく然らず。斯る論辯は彼抽象的煩瑣的時好を以て本題を考ふることより起る所の密室的狹隘「ロジック」の一片にして、即ち舌言的威嚇たるに過ぎざる也。

若し吾人の感識が自から吾を欺むき得べき者ならば、斯る煩瑣的論辯威嚇に對して、吾人は之に答へて然りと曰はむ。隨て狹隘「ロジック」を續くることを得べからむ。然れども、吾人の感識が自から己れを欺むき得るとせば、吾人毎日毎時の行爲自から欺かざること如何にして自から識り得る乎。豈危ふからずや。若し此くの如き識境に陥ひるときは、吾人は平生眞理と誤謬とを區別する爲めに一つも自から其標準本位を有せざる者と爲らむ。而かも恒に彼懷疑論の爲め壓倒せられつゝあるに至らむ。此くの如きは吾人の斷して肯むすべからざ

る所也

(6) 今學究的煩瑣的論辯に拘はり密室的狹隘「ロジック」を事とするは全く無用たり。何となれば、此問題は唯實行に於て其れ自から解決せらるゝ者なるが故也。蓋し吾人の感識が或場合には吾人を欺くこと無きに非すと雖ども、而かも其多くの場合に於て吾人を助けて以て最貴重なる智識を獲せしむることあるは吾人が認むる所也。斯くの如く其感識が吾人を助くる所以は、其感識を理論化するに由りてに非ずして、而かも之を實地に行用するに由りて也。

(7) 抽象的問題は如何に不十分なる記録が證據と爲り得るにもせよ、神學的解決を許さず。知識問題と均しく必ず實行に於て之を解決せざるを得ず。聖書の價値は彼抽象的理論に由りて之を決せらるべきに非ずして、而かも此世界の宗教的生活に於て、聖書の何者たる乎を

自から證する所の實行的研究に由りて以て決定せらるべき者也とす。此方法を以て試験證明せらるるときは、聖書の最上至尊崇高的意義の明白なること、天下何者か焉れに如かんや。視よ、吾人が太陽に於る何等の黒點を發見するにもせよ、太陽の赫々として太陽たる無上靈光は依然として永く存するを。

(8) 聖書無謬に就きて抽象的問題の無益且つ不適當の甚だしきこと、此くの如く其れ明らか也。若し此教理が緊要なるにもせよ、吾人現今に在りて無謬的聖書其者を一つも有せざるが故に、不幸なる難途に居る者也。若し吾人が此教理を許すにもせよ、之に就きて何事をも吾人は爲す能はず。故に此教理無きが爲めに、吾人が難途に苦しむと均しく亦此教理あるが爲めに、吾人は却て煩擾に困しみつゝある者也。然るに如是明白なる事實は彼徒勞的解決を企つる…… (即ち何で有

る乎と云ふ研究の代りに、何であらねばならぬと云ふ解決を企つる所の)……密室的狹隘論の欺瞞の爲めに掩匿せられつゝあり。之を要するに、聖書無謬の教理は、實に一つも實際的利益を有せざる者也。此教理は、元來之を唱ふる者等が、例述の具体的事實を輕々看過し去り、而かも彼繪畫的假想の論理的結果と相混雜する所の抽象的煩瑣論に偏傾耽溺せるより起れる者也。吾人は宜しく密室を出で去りて而かも純に具体的事實を觀ることに由りて、始めて諸困難に對抗して直ちに之を排除するを得べし。苟くも此境界に達するときは、是れより先き論理に於て困難とせし所の多多事件は今や其實行に於て全く簡單なることを、吾人は茲に發見す。往昔プラトールが、動の理論を研究しつゝ、『移動』の抽象的不可能を説明せしときに、ダイオゼテスガ泰然と躬親からプラトールの面前に立ちて歩行しつゝ、彼プ氏の理論を一言の下に

喝破したりき。其れ然り、具体的の事は具体的に之を證明せざるべからず。而かも彼抽象的異議は實行を以て之を破除し得べきこと毎々之れあり。

第六章 聖書と天啓

(1) 聖書に對する此くの如き誤的概念及び其概念より生ずる所の諸抽象的且つ學究的議論は、大に神的啓示の意義を晦ましめ且つ神啓の採納を妨げたり。是れより先き吾人は聖書無謬の説を維持すべく、各細條細節に於て毎に神啓を發見すべく而かも彼從來諸傳説に於て之を神に歸せられたる所の一切事物の神的を辯護すべく、檢束せられたる者と自から假定しつゝありたりき。蓋し神啓は吾人が神と神の性格と神の志望とに就きて學びたる所の者に於て成立する者にして、

而かも其は主として、歴史的の一大運動に由りて成さるる者也とす。即ち聖書は此一大運動の産物にして、又此一大運動の史的記録たり。亦其文學的記録たり。天啓の眞理は何れの場合に於ても、歴史の通則眞理に屬する者にして、而かも記録其物が無謬たりと云ふを以ての故に非ず。然るに、吾人は此記録と天啓とを混一せしめ而かも此記録の感應に就き、吾人手製的發明の澁硬なる理論の爲めに自繩自縛の困難を自から造りつゝあり。此くの如くにして、吾人は寫實的及び相對的價値の總識を失ひ、而かも聖書中なる其時日先後如何の争。作者の誰たり彼たりとの争。及び不要不急なる細目簇生の爲めに神の善良なる新報を誤解すること屢ばなりとす。彼モーセが其自己の死際の記事を如何にして自から談り自から記したる乎。(イ)モーセの屍骸が豫言者イリシアの骨と相觸れたるときにモーセが實に甦りたりし乎。(ロ)預

言者が其杖を水に投せしときに往昔曾て亡失せるモーセの斧が實に水面に浮み出でたりし乎(ハ)等の如き瑣末無要の疑問にのみ吾人が拘泥することに由りて、クリスチアン大事實を吾人は見ること能はず。吾人が天啓の證據を論するとき、徒つらに、抽象的無効的方法に由りて進行するを免かれず。吾人は徒つらに、彼奇蹟と預言との煩瑣的議論を以て之を始め、如是抽象的考慮に由りて以て天啓の眞理を建設せむことを索めたりき。

(2) 吾人は是迄の如き考索方法の誤まれることを、今や始めて覺れるが故に、吾人は今や此方法を變更し而かも吾人は悔改の爲めに適應すべき良好果實を齎らすべきことを必要とす。天啓なる者は他無し、主として神と神意とに對する吾人の新想念に於て成立する者なること。而かも其他一切……歴史及び諸記述書類は……是唯此新想

念を表明し之を保続せしむる方法たるのみなることを吾人は認識せざるべからず。即ち彼聖書的法律が尙ほ未だ完成せざりし遙かに以前に於て『クリスチアン』想念が夙とに起りたりしが如く、聖書其者が未だ成立せざりし遙かに前に諸處の教會が『クリスチアン』と爲りつゝありたりし也。即ち諸教會が『クリスチアン』たる所以は單に新舊兩約書の教理が現存するが故に非ずして、而かも此『クリスチアン』想念の現存するが故に在り。其れ然り。故に吾人の爲め善良好果たる且つ確實なる天啓論は、必ずや其根本的想念より發行せざるべからず。亦世界に於る其現實的根本想念の存在と權威とより發生進行する者ならざるべからず。若し彼奇蹟と豫言となる者は決して此くの如き議論(天啓論)の爲めに現今満足なる起點を充たす能はず。若し基督教が地球上到る處に世界的權威たり精神的大力たるに非ざりしならむには其

根原始は單に神秘的同一の事物たるに止まるべく、而かも彼數千年前に現出せし所の古事は一つも吾人をして之を信せしむる能はざるべかりし也。之に反して、吾人が基督教は此くの如き崇高純潔偉大の權威たることを發見するときに、亦人類歴史の大洋を通貫して雄大なる灣流の如くなる基督教の進歩を吾人が追跡するときに、亦基督教文學を他の古代諸宗教組織と彼此比較するときに、吾人は史的及び心理學的大問題に對し、神が己れ自からを啓示し、且つ此地球上に神の王國を方さに建てつゝあることの銳觀力即ち洞觀に於てすることを除くの外、一つも此大問題を適當に解く者無きことを吾人は實に發見せり。此銳觀力によれば、現在第十九世紀の事實は上古史と相一致しつゝ、而かも、古代史は恰かも其光りを現在事實に注射しつゝある者たり。古代史と現在事實との相互調和及び其相互依信は正さに此に在り。而

かも吾人が確信して終局に徹底せしむる所の發顯的組織の道德的靈性的偉大なる者は實に此に存す。新舊兩約書の教理及び基督教の諸證は、若し其議論(天啓論)の良好結果に達し得べしとせば、須らく此廣大なる道程に於てせられざるべからず。之を要するに、吾人は天啓論に對し、彼是れ迄の如き書籍上文字上の抽象的煩瑣的議論を離れ去りて、而かも基督教歴史と其結果との具體的議論に進入せざるべからず。

(3) 聖書無謬の問題は如是議論に於て一切之を加入せしむるの必要無し。吾人が必要とする所の者は、唯其記録を一般信實として考量することに在り。亦天啓の行動たる、聖書全体を通じて之を達觀し之を考究するを必要とす。而かも單に其粗大なる始部に就きて、或は其枝派に就きての如き其一端一邊に就きて之を割穿すべき者に非ず。

天啓的行動の最初段幕の重要は、其抽象的研究に由り、若くは超自然的

伴侶の抽象的研究に由りて判せらるべきに非ずして、寧ろ唯歴史的に其各段幕より來れる所の者に由りて、之を判すべし。之に反して、單に段幕其者に拘はりて、之を取るときは、其は全く粗生物のみ。亦抽象的に之を取るときは、妄誕と視做さるゝや必せり。其段幕より發生したる所の者如何を審察せずして、單に段幕其者のみを取るときは、卑陋無價と視做さるゝを免かれず。唯之を歴史的に取り、且つ基督教組織と相互連絡ある點に於て之を取るときは、茲に始めて其深意味を見るべき也。

(4) 此點に關して、急激派と保守派との双方が、各其誤信を有すること頗る多し。其例を擧ぐれば、左の如し……

甲派は以爲らく、「聖書無謬」と云ふことは是れ基督教の大確保也と。乙派は以爲らく、若し吾人が聖書の誤點を示明せむには、是れ基督教を

顛覆せしむる者也。」……
 甲乙共に誤れり。キリスト教は唯自啓的神を確保するのみにして、而かも、彼無謬的聖書を確保する者に非ず。聖書が生れ出で来る所の歴史的行動に於て、神が恒に在せることを示す者はキリスト教にして、即ちキリスト教は吾人が無上貴重なる神の知識を聖書に由りて得たることを吾人に示すのみ。此外には何者が在ると否とに拘はらず、神は恒に在して其天啓の爲めに行動を指導しつゝありたりき。此點に於て眞正唯一なる「クリスチアン」信仰は唯此くの如きのみ。此信仰は新舊兩約書中に於る誤點と誕話との發見に由りて之を輕重し或は之を變搖し去るべき者に非ず。假令ひ是等の誤謬と誕話とが兩約書中に在ることを吾人が許容するにもせよ、他の一方に於て、神と神の志望とに對する宏大的多望的活的想法が歴史的系統に沿ふて吾人に傳來し

たることを吾人は認めざるを得ず。彼太陽を見よ、其黒點があれば、逆未だ曾て其光輝を妨げざることを。之と均しく、吾人が假令ひ、一方に於て、聖書中に神秘的、非史的事件の存在を主張するにもせよ、神の自からする至高的啓示の依然として至高的啓示たることを妨げざるや明らか也。是れ兩約書が假令ひ地的の物なるにもせよ、其が明白容るゝ所の財寶の無上尊嚴貴重なる所以也。キリスト信徒が……キリスト信徒の思想家が聖書に就きて保つ所の信仰は他無し、神の現在と全体として其天啓的行動に於る神の指導とを此書に於て學ぶべきと確信することは是也。其他の細目末節に就きては、善かれ、悪しがれ、一つも係はれ所あるを要せず。即ち吾人が主張固執する所は、假令ひ、聖書中にも彼誤謬的や、神秘や、誕話や、此くの如き者が在るにもせよ、而かも其全体の志望……即ち神の天啓をして、之が爲めに晦ましめざる

ことは是れ也。此志望に對して、彼異論者等が何事をか謂はむと欲するならば、須らく先づ其注意を中心的思想に定向すべし。而かも細目に傾意すべからず。之を要するに、神の自啓に對する歴史的行動の想念は、此場合に於る超自然的大要素たり。而かも、此大要素は彼細目批難の爲めに些しも攻制せらるゝ者に非ず。

(5) 彼舊新兩約書中の記事に於る、其時日の先後や早晚や如何。作者の誰たり彼たる乎。原始記録の細目如何。……此くの如き煩瑣なる問題と天啓的思想の組織とを此際分離することに由りて、吾人は依然として、「クリスタアン」たるを得るは勿論のみならず、亦之に由りて以て次ぎに擧ぐる如き無益の疑穴に陥ひるの愚を免かるゝことを得べし。即ち此に示さるゝ所の……彩色刷版聖書の標本なる者を見よ。此くの如く聖書の各一頁面に於て、故さらには、或は五色刷或は八色

或は十色若くは十四色の殊彩を見ることは、頗る煩はしきを覺ゆるに非ずや。頁又頁を開きつゝ、此くの如き燦爛珍錯なる彩虹の影を見ることは、恰かも彼行文批評の爲めに圈點を加へられたる標語の混雜なる如き感覺を讀者に與ふる者に非ずや。若し吾人が自から本意に感ずる所の効果を以て即ち教役者以外通常人の聖書を読む者に及ぼす所の効果を推判するときは、『彩色刷聖書は、其讀者をして、之が爲めに、該書の』よりも善き『智識を増さしむる者にも非ず、亦人民間に於る該書の尊敬を之が爲めに増さしむる者にも非ず』……と謂ふことを吾人は斷じて疑はざる也。

(6) 若し吾人が強て聖書を飾り立て、徒づらに之を辯護して、聖書は無謬的に口授筆記せられたる者なることを唱ふるときは、……或は又聖書中の諸書は其各氏名を冠せる原作者の手に由りて手録せられ

たるまゝの者にして、而かも後代修正に係れること絶無なることを唱ふるときは、是れ恰かも前陳彩色刷聖書と同一の結果に陥ひるべし。之に反して、此くの如き強飾を爲さざるときは、茲に一つも困難無く亦一つも憂慮無く、而かも聖書をして神の天啓に對して、従前よりも、多く利益ならしむることを得べし。何となれば、此くの如くなるときは、聖書は、吾人をして彼單一なる口授或は彼單一なる文章の代りに、古代教會の史的進行と其複雑なる宗教的思想及び其意識自覺とを有せしむるが故也。

(7) 然れども、或は茲に疑ふ者あらむ。曰く……「誤點を含める書籍が何を以て其他の總べてを信せらるゝ乎と。……此疑問は本題に對する狭隘論クローゼットチヌカスシヨより起れる所の學究的困難なりと雖ども、此點は、吾人が既に前段『聖書無謬』の論に於て之を指示したりし所也。此疑問の單

純言語的煩瑣的性質を判断せむが爲めに適當なるを以て、今重ねて之を指示せむとす。蓋し是れと同一問題は吾人自己の能力使用(イ)若くは某種證憑に於る吾人の信用(ロ)に就きて問はるべき者にして、即ち是等の事件(イ)及び(ロ)は時として誤謬あり易き者也。而かも若し人が、自己能力(イ)及び自己友人相互の信任(ロ)を保證すべき抽象的標準を發見せむと企つるならば、吾人忽ち自から彼太大的懷疑に陥ひるや必せり。然れども、之に反して、自己の能力(イ)に就きて、吾人が徒づらに理論を作すこと無くして、直ちに自から之を使用するとき、耳目手足何れなりとも、極めて快暢適當に能力を發展し之を樂しむことを得べし。千言萬語を以てするも之を解くべからざる的問題は單一實行を以て之を解決せらるべきこと此くの如し。

(8) 何等の分野何等の範圍たるに拘はらず、智識本位の一般問題は

冥想的よりも寧ろ實行的也とす。學究的煩瑣的議論は無用且つ不毛なるを常とす。宗教に在りても、亦哲學に在りても、彼外部的表面的應用に由りて眞理を啓示すべき單純本位ある者乎の如くに、眞理若くは權威の最終局本位に就きて抽象的理論の多量堆積ありたりき。然れども其實は此くの如き本位は一つも之れ無し。唯靈活的且つ批評的而かも經驗的生活の材料に富める意志其者こそ實に唯一無双の本位にして、此本位は決して彼單一簡略なる表言に之を包括せられしむること能はず。意志は確在の本位を有せずと雖ども、諸般事物に就きて、意志は確在たり。實際的確在は具體的事件に於て吾人が望み得る所の總額也。此確在は彼狹隘なる密室的冥想の產出物に非ずして、而かも實在と現接して、茲に始めて產出する者とす。此實在に就きては吾人は常に屢ば疑と誤論とを起し得と雖ども、實際に於ては、其疑と誤論

とは忽ち消散するを例とす。此實際的方法に於て、舊新兩約書を用ふべき人々及び神并に神と人との關係及び吾人に對する神の志望如何を思考すべく學ぶべき目的を以て兩約書を用ふるを必要とす苟くも善く此くの如く用ふる人々に在りては假令ひ兩約書中に彼神秘的非歴史的事件の多數が包含されあるにもせよ、之に拘はらずして、善く兩約書の宗教的大價值を判斷することに於て一つも困難を受けざるべし。

(9) 確たる實際的性質に對する此洞觀 敏觀力は冥想界に於て極めて通常と爲りつゝあり。而かも極めて緊要なる前進を徴しつゝある者とす。専門的懷疑家は其地位が今や既に過ぎ去らざるにもせよ將さに過ぎ去らむとしつゝあることを自から發見せり。何となれば彼聖書に對する故障異論なる者は徒づらに彼抽象的煩瑣的型式なる

を常とし而かも、此懷疑的異論は今や其永久凋萎と其愚痴とを自から
 顯表しつゝあるが故也。之と同一なる敏觀力が、宗教世界に於て通常
 と爲るときは、其は一大利益たるべし。是迄此力が未だ普行せざりし
 が爲めに、彼抽象的無謬的本位及び其本位を持つべき要求が尠からざ
 る混雜を既に起したるは勿論而かも今尙ほ起しつゝあり。此くの如
 き事物(本位)の一つも存せざることは明らか也。假令ひ之あるにもせ
 よ此くの如き事物は助けと爲るよりも寧ろ害と爲るべきことは均し
 く明白也とす。蓋し撰擇(イ)の爲めに、愛(ロ)と忠順(ハ)との爲めに餘隙を
 遺さざる所の本位なる者は、人生の道德的歸着點を破るべし。心情と
 意志とは九九率表を以て之を行ふべき者に非ず。靈性的眞理は此く
 の如き九九率表を以て檢束さるべき者に非ず。之を要するに、絶對的
 本位と絶對的權威とは時として妄想……即ち吾人が救拯を保つ爲

めに之を必ず信せざるを得ざる某件ありと想ひ、若しくは之を必ず行
 はざるを得ざる某件ありと想ふ所の妄想……の上に居る者也。勿
 論此場合に於て、吾人が自から其必須要求を充たす者は何たる乎を知
 らむと欲するの懸念あり。然れども、此くの如き綜合は吾キリスト教
 の靈性的概念に既に達したる所の人々に在りては、斷じて其存立を容
 れざる者也とす。

第七章 自然的天啓と超自然的天啓

(1) 此双關對偶は天啓の傳說的議論に於る一大部分を占め而かも
 許多混雜の淵源たり。彼傳説家は自己と異なる所の他の諸人即ち彼
 超自然的天啓を拒否する所の諸人及び聖書の純粹的自然的解釋を企
 つる諸人に對して、之を咎むることを常とせり。而かも之と同時に、種

々の企謀は赤裸々の自然論に移進しつゝあり。此論題に就きて吾人の思想を明白にすることは大に善し。

(2) 彼赤裸々の自然論及び其れよりも尙ほ惡き自然論が古來今に至るまで多々之れありたることは言ふを俟たず。此所謂自然論者は何事に就きて一切自然主義を冒認し、即ち不期的事件不故意的事件の大部を目して以て盲目的非人格的法式即ち所謂自然と名づくる所の系統法式の存在することを假定冒認しつゝ、以爲らく是等大部各種の事件たる、是れ一つも神的思想若くは神的志望を代表する者に非ずして、而かも單に自然的機械力の副産物たるのみと擅まゝに自から假定冒認する者也。此感覺によれば彼自然其者は志望と智識とを排斥して、而かも通俗的宗教思想が之を尊む所の嫌惡と恐怖とを保證する者也。

(3) 此自然なる者の概念は元來彼野生的感覺即ち適當なる批評に由りて適當に馴和せられたること無き所の感覺的思想の範圍に於て、勃然として生長増殖せり。此概念は彼感覺的種族の偶像たり。此くの如き幼稚的概念野生的偶像は近世哲學の大發達に隨ひ哲學的批評の進歩に伴ふて自から其薄弱無根なることを發見せられつゝあり。即ち彼所謂自然其者は單に未開的思想の妄想空想たることの達觀點に向て、哲學の批評力は方さに速かに人心を提導しつゝあり。彼彩色繪塗せられたる魔鬼の偶像は若し其を現實存在物と假定せるときは觀る者をして之に畏れ之に服せしむることあるべしと雖ども而かも其眞性を看破せらるゝときは、是れ單に無意無害の一木片たり石塊たるに過ぎず。彼の所謂自然なる者は此魔鬼偶像と均しきのみ。何れの場合に於ても、批評的思想は、彼自然なる者の獨立獨行自活自動と云

ふことを聴容せざるべし。果して然れば彼論者が所謂自然其者が行ふと云ふ所の一切事件は、其實は自然以外の一大権能力が在るありて以て之を働らかして之を行はしめ之を定斷しつゝある者なることを表示する者に非ずして何ぞや。若し其一大権能力が、聰明睿智的其者の力也とせば、……有神論者が信ずる如く……自然其者は即ち神が意志する所の事物を單に行ひつゝある者たるに過ぎず。此くの如にして、自然其物は單に神の思想の發表と爲るは勿論、自然的行爲の一切細目なる者は直接に神の命令に由りて行はるゝ如く、神的志望に根原しつゝあること知るべし。而かも「より深き心理學は自然其者が自から適當固有の活力を有てる乎」を疑はしめ。又自然其者が其現象の原因を自己以外に求めざるを得ざる所の現象法則たるに止まる乎。將た其法則よりも以上の者なる乎」を疑はしむ。此觀察に就きて吾

人が自然と呼ぶ所の者に關し甲乙二個の疑問あり。即ち……
(甲) 現象其者は如何。其性質は如何。其法則は如何。其一般に於る内部相互の關係は如何。
(乙) 此自然法が基づく所の「偶然事」及び此自然法が由りて以て進行する所の「偶然事」は何くに在る。
(甲)の疑問は唯歸納的科學に由りてのみ之に解答するを得べし。
(乙)は專ばら心理學に屬す。有神論は(乙)に對する唯一無双の解答たり吾人が自然其者に由りて意味する所の一切は皆神に於て生き且つ動き、且つ其存在を有つ者とす。彼獨立獨行的自然其者は既に消滅せり。而かも自然其者が存留する一切は現象的秩序是也。此秩序は完整なる其基礎地盤を神に於て有ちつゝある者とす。然れども、此秩序は研究の緊要標的たり。吾人が既に此世界の神工た

ることを決定したる後吾人は尙ほ「此世界は果して是れ何者なる乎。此世界に於て神が如何に働らく乎。神が自から之に由りて進行する所の法則は何者なる乎。一切出来事が空間と時とに於て如何に連接せられつゝある乎。」に學ぶべく正さに勤めつゝある者也。吾人が此種の知識あるに非ざれば此世界は吾人の知解内に入り來るべきに非ず。然るときは吾人は寔に徹頭徹尾此世界に一切生活するを得ず。此觀察によれば、自然其者は單に現象法式の爲めに行はるゝ所の通名なるのみ。而かも各般の出来事は其現出の形象と其周圍の事情とに於ては自然たりと雖ども、其偶然事に於ては超自然たり。此法式の定律と一致して起る所の出来事は自然的也と雖ども、偶然事は全く超自然的也とす。一切の奇蹟が超自然なるべきが如く、最多數の通常事實が、其原因發動カウゼーションに於ては超自然的也。超自然的と自然的との彼此差異

は唯其現象の關係に於て存せるあるのみ。

(4) 有神論の一般範圍に於て、吾人は法式の問題(甲)と偶然事の問題(乙)とを判然區別せざるを得ず。而かも(甲)の問題が(乙)の問題に解答せざること及び(乙)解答が(甲)に適すべからざることは勿論とす。然るに之に反して、吾人が或は彼偶然事に對する判決を以て他の行動處分の法規をも判決すべしと妄想するが如き、或は又法規の發見が以て純精なる偶然事を啓示すべしと妄想するが如きは、是れ唯其心理的混雜より起れる者也。此(甲)(乙)區別の或者は天啓の研究に於ても亦必須なる者とす。即ち其一例を擧ぐれば……

天啓的行動に於て神が内在たることは固とより吾人の確信する所たりと雖ども、其確信は其神の行動の形象如何と云ふことまでも決定する者には非ず。而かも此形象如何を考究し如何なる廣さまで其行

動に於て、歴史の通則と人心の通則とを尋踪し得る乎を識ることは是れ吾人の自由に存留せられつゝある者也とす。……………

見よ、彼舊新兩約書の各記者が、各其事を記するや、彼の現象的起點より即ち(甲)點よりせずして寧ろ神的偶然事の自分概念よりし以て其事實を記せる者が多きに居ることを。此場合に於て、彼等各記者が彼第二原因或は媒介的原因若くは自然的法式に就きて、其出來事を語ることに無くして、而かも直ちに之を神に關説するを其常とせり。願ふに、何等の場合に於ても、彼兩約書の報告者の言語が、吾人の彼等と殊となる習慣を以て待つ如き現象的突飛隔離即ち理法の常則と遠く隔離せる現象の記事は蓋し曾て之れ無かりし也。若し彼「アルマダ」艦隊がペレスタイン海岸に向て侵攻の爲めにタイル港より出帆せりと假定し其艦隊が暴風雨洪濤激浪の爲めに潰散沈没せる場合と假定せむに彼昔

日の猶太人は其出來事を直ちに神意神力に歸し得べし。然れども、若し吾人をして之を語らしめば、則是全く其際海上大暴風激浪を視たりしことを記せむのみ。此くの如きは是れ吾人が敢て神の動作を否斥するに非ずして、而かも唯其形と法との概念を修正するに止まれり。蓋し偶然事變其者は、超自然的なりと雖ども、而かも其事變……………即ち海上暴風激浪の如き……………の方法は即ち自然的なるが故也。故に其目的と方法とは決して混淆すべきに非ず。

(5) 兩約書中に在る所の超自然的記事の多くは皆此類例たることは明白にして疑ひ無し。故に之を読み之を學ぶ者は宜しく其現象の起點よりすることを避けて、而かも寧ろ偶然事變と其神の志望との起點より之を理會すべし。吾人が斯く云ふ所以は彼奇蹟を嫌ふて之に反抗するが爲めに非ずして、而かも、唯奇蹟の記事其物の研究及び其各

記者の思想の習慣を研究し自から導く所の結論として、此くの如く斷言せざるを得ざる也。兩約書中に於て、吾人が特殊奇蹟の記事に遭逢し、自然法を破壊し超自然的權力の現存を啓示する所の奇蹟に會する毎に、吾人は之と同時に、他の一方に於て、普通自然的永續力が尙ほ恆ねに存行することを觀る。彼一切諸理法を破毀する所の諸奇蹟は是れ知解すべき的の者にほ非ざる也。……所謂理外の理にして、而かも其不可解的を以て之を理會すべき者也。……故に吾人は之を理會して、以爲らく……『奇蹟は若し之れ無きときには、吾人が誤まりて彼自然的機械的行動を過重過大視して徒づらに之に盲從する弊害を諫止せむが爲めに、此くの如き奇蹟を示し、以て吾人人類の感的意志に神の力と神の志望とを覺知せしめむが爲めに神が用ふる所の兆徴として之を解すべき者也』と。然れども凡そ兩約書中の奇蹟なる者

は之に關する民族の歴史的先例及び周圍事情と必ず密接の關係あることを吾人は認めざるを得ず。苟くも此關係無くして濫りに行はれたる者と吾人は假定するを得ず。其れ然り、若し神が奇蹟の方便を以て吾人人類に高等算術的眞理の天啓を與ふる場合と假定せむに、其奇蹟は彼バタゴニア人若しくはホツテントット人の如き民族に向て行はるゝこと無くして、而かも寧ろ其文化發達及び數學的智識の發達が能く此天啓を受用するに適當なる民族に向て行はるべきや必せり。視よ、彼神的に播かれたる種子すらも亦尙ほ其豊熟多稔ならしめむが爲めには豫かじめ準備整耕せられたる所の良田畑を必要とし、而かも彼荆棘的磽确の地は此くの如き豊作多收の力無きことを。

(6) 吾人が單に兩約書を認許するのみならず、尙ほ又天啓に於る奇蹟的要素をも認許するとせば、天啓的行動が自然的起點より研究せら

る、ことをも認許するや明らか也。詳しく之を言へば吾人は其天啓的行動の進歩及び發展に於て、生活(イ)思想(ロ)及び歴史(ハ)并に人類發達の通常理法(ニ)を追踪尋索すべく求むることを得る者とす。若し其思想明白なるときは、此くの如き研究は其天啓的行動の超自然的淵源に就きて一つも疑を抱くべき傾向を有せず。他の一方に於て、此研究は、吸收的人類趣味及び合理的趣味を此問題に供給する者とす。然れども、若し人類が神の爲めに麻痺せられ、且つ不可解的絶對の爲めに自然的が排斥せられたる場合に在りては、此問題は無趣味と爲るを免かれず。蓋し自然主義其者は明暗清濁兩面の觀あり。彼暗濁方面、即ち神を無視して、而かも彼器械的自治的法式……即ち自分自から其何たるを識らず、亦其所産如何をも自から識らざる所の法式……の上

に非人格的理法を建つる所の自然主義は是れ吾人が宗教的權威に於ても、亦哲學的權威に於ても、双方共に容れざる所にして、是れ吾人が斷じて之を非とし、之を排斥する所也。然れども之に、反して、其清明方面即ち神の一切行爲……自然に於る、或は天啓に於る……を通じて理法の永續及び合理的連接を追踪すべく企つる所の自然主義は是れ吾人が宜しく歡迎嘉納すべき所也とす。

(7) 此くの如き自然主義は決して偶然的事變の説明を與ふること無しと雖ども、而かも其主義の行進すること彌よ廣大なれば隨て彌よ其善良結果を顯はす者とす。即ち其主義の性質と其價值とは、次の例に由りて識らるべし。

『人類は其時代と其周圍事情とに由りて之を説明さるべし』と云ふことは是れ吾人の通習たり。假例へばニウトンは未だ曾てブーシマン(南亞弗利加、或は濠洲土人を通稱する語)民族の中に出生せ

す。彼れニウトンの行爲は彼れの生國に爲て其未生以前に豫かじめ存立せる文明と亦其先達なる數學家の行作あることを必須とす。此事や固とより判然として疑ひ無し。此意味に於て、ニウトンは即ち彼れの時代と其周圍事情とに由りて説明せられつゝある者也とす。然れども、單に爾が云ふのみにては、尙ほ甚だ皮相たり。時代と周圍事情とは英國に於る當時幾千人の各數學家の爲めに皆齊しと雖ども、而かも彼ニウトンの特出天才と相連結せらるるまでは、他の一般數學家に對しては、其所謂『時代』と『周圍事情』となる者は、何等の効能をも未だ曾て顯はさざりき。此點は此れ其所謂時代と周圍事情とが解説せざる所の不定事件たり。故に吾人は人生を研究するに當りて、單に其所謂時代と周圍事情とのみに拘はることを得ずして、而かも其人より以前の先蹤前跡及び其周圍事情を考察すべきの必

要あること明らか也。然れども、人類自身は挺然獨立の要素たり。假令ひ前陳諸事物と相連接するとも、其事物の爲めに、共に混淆せられたるべき者に非ず。亦其事物より推定さるべき者にも非ず。之と同じく天啓の自然的研究は其緊要なる準備……即ち歴史的永續、心理學的一致、合理的調和を示し得る者とす。然れども、吾人が内^{キント}在的、自啓的^{キルト}の神に就るまでは、吾人は一つも其終極に達せざるべし。

第八章 文學と教理

- (1) 上來吾人が恰かも交渉せる所の困難は論理的に係れる者及び心理的に係れる者なりしが、今や、吾人は更らに文學的及び語學的性質に就きて天啓を論せむとす。
- (2) 天啓を理解するに就きて尙又一つの大障礙は用語法の誤解

に在り。即ち聖書の言語を誤解して、之を澁硬なる論理的意味に取り、恰かも彼法廷に於る證據論の如く、若くは彼幾何學に於る定理の如くに之を解かむとし、其結果として、最多の誇張的拗戾に陥ひるに至れり。

(3) 蓋し普通論理的理解的言語の外に、尙ほ幾多各様なる特種言語あり。即ち或は彼詩的言語あり。或は意識の言語あり。或は感激的言語あり。或は渴仰的言語あり。或は宗教の言語あり。是等各様特種の言語は宗教の法典條規を以て之を推驗せらるゝときは無稽的言語と視做さるべし。此くの如き特種の言語は唯其各固有の場面に於てのみ理解さるべき者、即ち其言其語が由りて生ずる所の生命に由りて之を理解さるべき者とす。例へば(Flag)「國旗」と云へる一語は以て此用語の解法區別を説明することを得べし。即ち國民の標章として、國民の生命、其歴史、其熱望の標章として………之を視るときは、吾人の

感情及び愛國心の見地よりして、其旗に就きて全く真正なる幾多大事柄を語り出だすことを得べしと雖とも、之に反して、若し單に觸覺の見地のみよりして、之を視るときは、多大の談話は無稽と視らるべし。何となれば、單に觸覺の一點のみよりすれば、旗其物は單に彩色燦然たる布帛製なる一の旗幟たるに過ぎざるが故也。然れども、生命と想像とを以て之を視るときは、國旗は即ち國民祖先の光榮名譽なるが故に、此國旗其者は單一なる彼布帛よりも遙かに多大なる者とす。

(4) 言語其者に於る活用上此くの如き區別あり。然るに、是より先き、宗教上談話に於て、此緊要なる區別を忘れ、兩約聖書の研究に於ても、亦此特殊緊要區別を識らざる者、頗る多かりしは、是れ誤りの太甚だしき者とす。昔者或る數學家先生が、ミルトンの有名なる『パラダイス、ロスト』『失樂園』を讀み了り傍人に語りて曰く………「予は此書が何等の

證明をも與ふることをも見ず云云。」と言ひたりき。是より先き兩約聖書を讀む者の多くが、輕々誤解此數學家先生と同様なる精神を以て研究を了り、即ち彼等の研究たる、彼法律的條規を解するが如くに聖書を解釋するの傾に陥り而かも、彼此前後相關的文脈如何を味ふること無く、亦往昔希伯來人時代思想の方法如何、聖書記者各人の志望如何を審察することも無くして、而かも、教理的にのみ之を解釋すること屢ば之れあり。此くの如き凡俗的解釋に基づける多多細小宗派あるは怪しむに足らずと雖ども、當だに細小宗派のみならずして、彼正統的諸大團體に於ても亦此種の誤謬に陥ひりつゝあること尠からず。其結果は、彼『フラグ』(Flag)に就きて、言語の解釋に由りて生すべき背理と相均し。

(5) 説明の一端として、『信仰を透せる恩寵に依る救拯』と云へる教

理を茲に考へむ。凡そ道德的發達の各人は、『自己善行の基礎として、神の前に受報すべき一切要求』を拋棄することに躊躇せず。而かも彼が躊躇無く神の恩寵内に加はることを得ば、其は神の無限謙容的恩寵に基づかざるを得ざることを確認すべし。若し吾人の低卑的生活より躍然超昇して以て聖靈の伴侶と爲り、以て聖靈的生活に入ることを得ば、此超昇は、是彼外部的禮式儀文の器械的執行に由るに非ずして、而かも唯上よりの恩寵及び其恩寵が啓示する所の理想に於る吾人の信仰に由る者なることは明白也とす。假令ひ吾人が超昇し或は降落することあるにもせよ、吾人は上陳の如き神の恩寵と其理想とを確信し、而かも之に向て奮進せざるを得ず。道德的及び宗教的生活に於る深大なる活力的眞理は此より外に一つもあらざる也。然れども、此要義は恒に生活の方面より之を理解せざるべからず。亦必ず之を活力的に、倫

理的に、精神的に了解せざるべからず。若し然らざるときは、即ち此教理が誤まりて彼治罪法的模型に依れる救拯計畫に轉入するとき、之が爲めに、其生命的性格を亡失し、而かも徒づらに彼不可信的多毒的と爲らむのみ。豈に深く警めざるべけんや。彼贖罪に就きて器械的解釋は屢ば誤りて不徳義的結論に陥ひたり。而かも此弊を能く防制すべき者は他無し、何れの場合に於ても唯健全なる徳義的直覺に在るのみ。

(6) 解釋の歴史は大に教訓的となるべし。是れより先き天啓問題を論ずる器械的方法よりして、彼聖書本文に最も慣れたる人々が聖書の意義を多々誤解ること屢ば、之れあり。吾人は之に反し、聖書が單に教條の書に非ず、亦併せて宗教的文學の一集團……即ち聖書は宇宙的文學方法に由りて之を解釋せざるべからざる所の宗教的文學の

集團たることを吾人は發見せり。吾人は此新發見に由りて、茲に始めて聖書解釋上の混雜を漸く脱しつゝある者也。

(7) 言語に就きて、同一誤謬の尙は一層大なる者あるは他無し、彼不可視的事物に係る一切言語の隱喩的性質を誤視することに於る誤謬是れ也。蓋し徳義的及び精神的眞理を表示する方法は、吾人唯自己の物質的生活と經驗とより借り來れる所の一種形象を除く外に一つも之を有せず。此くの如き場合に於て、事物の代りに隱喩を用ひ若くは事物の説明の代りに隱喩的註釋を用ふることを忌む。故に此忌を犯すこと無き爲めに能く吾人の思想を働らかしめざるべからず。此思想の働を怠たり或は之を誤まれるが故に其怠誤の結果として、彼傳説的神學の大部分は彼誤解的隱喩の註釋説明と爲り了れるに至りたり。聖書に於て、イエスキリストが與へ玉ひし所の明瞭なる諫告……即

ち「儀文は殺す唯聖靈は之に利益し其生命を與ふ」哥後三章六節……と云へることを彼等傳説的神學は識らざる也。其結果として、歴史は之が爲めに混亂爭軋流血を以て浸たされたり。豈に慘ならずや。若し能く此に反省してクリスチアン談説の隱喩を整理縮約して以て其純粹旨義に還元せしむることの一般企畫をして遂行せられしめたらむには、以てクリスチアン思想の一大濾清を成功することを得べき也。以下各章に於て、吾人は他に代用すべき語無き場合に止むを得ずして仍ほ隱喩を用ふべしと雖ども、而かも吾人は敢て隱喩の奴隸と爲らざるべく、而かも自由に之を撰擇利用すべし。古代宗教的談説の大多數なる隱喩は吾人に在りては、無感動無趣味たり。何となれば、其隱喩の基礎たり生命たる所の古代習慣其者は既に消滅して迹無きみのならず、吾人自から其思想の最良發表の爲めに、更に適當なる新隱喩を必要とするが故也。

(8) 世間往々言を作す者あり。曰く「聖書は讀みて字の如く之を解釋すべきのみと。」……此言を作す者は、其實聖書の代りに自己の解釋を用ひつゝある者也。即ち聖書の眞旨を捨て、而かも自己的解釋を用ひつゝある者也。

『彼はケルブに乗りて飛び風の翅にて翔り。』(詩十八篇十節)

『彼は其翮を以て汝を庇ひ玉はむ。汝其翼の下に隠れむ』

(詩九十一篇四節)

此くの如き聖書の章句を讀みて、誰れか之を字の如くに解すべきと妄想する者あらんや。此くの如き言語は宜しく唯其精神其旨意を味ふべくして、而かも文字言語の外形に拘泥すべきに非ざること明らか也。是れ獨り詩篇の場合に於て然るのみならず、他の大多數の讀方に於て

も亦之と同一要訣を應用せざるべからざることとは勿論なりと雖も、世人は往々之を曉らす。夫れ吾人が其五感の平面分野を離れて發言談説する場合に在りては何等の説明にも必ず翹翼と翎翮との要素を有する者なるに、彼一般世人は之を察せず之を曉らざる者多し。何ぞ其誤解の太甚だしきや。此くの如き言語を徒づらに濫硬的凝滞的に解釋するときには是れ全く其精神を亡失する者也。翹と云も翎と云ふ實際之れある物質を謂ふには非ず、此言語中に於て吾人が看出だす所の者は、其實吾人自身に屬して而かも吾人自から此言語を視聽する前に既に自から抱ける所の豫想に屬する者極めて多し。而かも今や一般に神學の進歩は此種言語の改良を促がし、天啓が吾人の爲めに價值あるべき者とせば、其天啓が必ずや之と相一致せざるを得ざる所の善意良徳の元則に基づきて其言語の讀方解方を整理適應せしむることに

於て神學も亦今や始めて成立しつゝあり。是等の整理適應に對して世上頑陋家の反抗叫呼は多々之れあり、以爲らく「如是整理適應の結果は神の言語をして無効に歸せしめたりと」……然れども、頑陋家の反抗は何ぞ取るに足らんや。何となれば、吾クリスチアン思想は一面には聖書に於て、一面には神子の靈的生活に於て、神の聖靈的自啓自示と相一致して以て聖書の文字を解釋することに恒に確乎として進行すべきが故也。是より先き世に行はれたりし史的神學……即ち多數の聖經本文が表示せられたる所の歴史的神學……の無量の多部は今や驅逐せられ去りぬ。是れ吾人が昔人に比較すれば彼等よりも良き文典家、好き註釋家と爲りたるが故には非ずして、而かも彼傳說的神學家の陳腐的方法即ち神と聖書とに就きて彼等舊神學が思想したる所の陳腐的方法が今や驅逐せらるべきの時期に達したるを以て也。其れ

然り、此くの如くにして、聖靈は恒に吾人を眞理に導びきつゝあり。靈的生活の現實は聖書の註釋に其理法を與ふるや此くの如し。

(9) 聖書解釋に對する思想の變化進歩此くの如し。此事實を目して之を杞憂し、此くの如き變化進歩は吾人をして致死的放縱に陥ひらしむべき傾向ありと云ふ者あり。然れども、如是杞憂は無益のみ。此くの如き傾向の能く自から匡正し、以て吾人をして確立緊肅ならしむべき所以の要點二つあり左の如し。

其一 聖書の價值は唯吾人が能く神の意志を識るべき眞摯的欲求に於て聖書を善く用ふることによりてのみ判定さるゝ者なることを記臆すべし。聖書に對する誤解失敗は他無し、既に前節にも述べたる如く、煩瑣的抽象的理論より起る。故に苟くも煩瑣的抽象的理論に迷陷することを避け、而かも實地的實行的方法に於て

聖書を用ふるときは聖書は恒に自から能く立ち、能く其眞正を證明するや必せり。之に反して彼實地的實行的に聖書を用ひずして、而かも徒つらに細目的穿鑿と試験題目とに拘泥する者は是れ聖書文字の受賣商人たるを免かれず。

之を要するに、細目的教條は今や復た建設し得べきに非ず。而かも吾人は唯「神とは何ぞ。神の意志とは何ぞ。」と云ふ洞觀に於て地球上に神國を實現すべき吾人の勤勞盡力に於て、徹頭徹尾實地的實行に勉むべき者とす。此要務の爲めに吾人は一切の必的要的報知通信と靈感とを有しつゝある者にして、而かも吾人は是れに由りて以て此要務を勉むるに足れり。

其二 吾人をして確立緊肅ならしむべき第二の要素は他に非ずして歴史の達觀に於て之を發見する者、即ち是也。古往今來孰れの

社會孰れの邦國に在りても、凡そ吾人人類進歩の行動……即ち社會的科學的經濟的宗教的……各進歩發展の行動が、他の一方なる保守的頑固派杞憂家の反抗を見ざるは莫し。是等の行動に對して彼保守的杞憂家頑固家が之を觀て以て聖書に對する致死的妨害物として痛く反抗せられざりしことは未だ曾て之れ有らず。聖書の原文は星學。地質學。經濟學。哲學。地理學。及び宗教自由。非奴隸主義。老衰婦女救惠。解剖術。藥劑學。種痘法。麻醉藥療。送風扇車。避雷針。生命保險法。教會に於て婦女が談説すること。及び一般婦女が公會堂或は議場に參集すること等の諸件を載せざるが故に以上列記諸件に對して彼保守的頑固家は每次反對の陣地に立てり。是等諸件就中最後事件(婦女が一般公會堂或は議場に參集すること)は是れ神の言語をして無効な

らしむる者と云ひて、彼傳説神學頑固派は嚴格に且つ多大の激昂を以て反抗的宣言を屢ばしたることありき。然れども吾人は今や是等諸件の總べての外に超立せり。而かも吾人は依然として、自からキリストチアンたることを信ず。吾人の爲めに神の言語は彼聖書の原文に非ずして、而かも唯其天啓に在り。……即ち神とは何ぞ。神の意志は何くにか在る乎に就きて其豫言者等を通して、獨子キリストを通して之を吾人に示されたる所の天啓こそ是れ真正なる神の言語なれ。此天啓に於る吾人の確信は極天極地萬世不易にして、而かも彼聖書其者に關する世人の觀察が幾回變化するとも何様に遷轉するとも、何の關係する所あらんや。否、此吾人の確信は永久不滅にして、彼聖書に關する世人の觀察が假令ひ百變千變するとも、未だ曾て變轉せざるべきや必せり。

第九章 進歩的天啓

(1) 天啓を理解することに於る困難は其歴史的な性格其進歩的性格に注意を缺くが爲めに起ること多し。蓋し天啓なる者は言語を以てせらるゝことあると共に、亦行爲事實を以てせらるゝことあるは、當然にして、而かも、其行爲的事實的天啓は必ずや歴史的な形状に於てせらるゝを常とす。彼幼年未成年者に對する天啓は自から其未成熟者に適應せられ其不完全を分配共有するを免かれず。イエス、キリスト曾て其弟子に語り、……神は善からざりし物件を汝等に與ふ、何となれば汝等人民の心、尙ほ頑硬なるが故也……と云ひしことありき。使徒パウロは、彼舊約の儀式を鄙陋の始めとして語れり。ペテロは、之を目して……堪へ難き軛として……呼べり。是等の困厄箝束は彼古昔不學無

識時代の人民に恰適相應せる者として、神が之を見逃がすべく、默過せし所の者にてありき。當時人類が尙ほ蒙昧幼稚不完全なりしと共に、其徳義は尙ほ不完全なりしが故に、斯る不完全且つ我儘氣隨なる人類の不規律的相互關係に於て行はるる所の事物は常に非理想多からざるを得ず。而かも唯彼善と惡との中間に彷徨徘徊することを免かれざりし者、是れ古昔幼稚時代の情況也とす。然るに、吾人は此情況を忘却して而かも近世開明清淨の眼を以て彼暗濁なりし古昔時代の初めを觀望するを免かれず。吾人の爲めにキリストは天啓を完成せり。而かもキリストは寔に唯一無双なる天啓の基本たり。標準たり。

(2) 前段に述べたる困難と同程度の故障は他無し。彼舊約聖書中に在る諸聖徒即ち神的觀察の價值無かりし所の人物特に神的認可の價值無かりし所の彼聖徒の性格の性格に就きて、吾人が今日感ずる所

の困難、即ち是れ也。然るに今是等舊約聖書中諸聖徒の多數はクリスチアン標準に照らして之を審判さるゝときは、憫れむべき無價値的たることは明白にして疑ひ無し。若し假りに神が一個のバリサイ人として、其伴侶の名譽を推薦する場合にもせよ、神は彼衆聖徒に對して一つも之を譽むべきことを有せざるべし。然れども、神は恩寵の神として自から啓示せしが故に、神は徹頭徹尾罪人に對しても謙遜自から卑ふして茲に來り就き玉ふこと、是れ全く事物の秩序なる者の如し。寔とに罪人たりし億兆人類と神との間に於て、『救拯』其事を處理すべき者は、今日に於て他に一つも之れ無きと均しく、既往に於て一つも之れ無かりし也。其れ然り、古代に於る彼諸聖徒が、當時未開的幼稚の世界の爲めには、相當十分なりしこと知るべし。而かも近世諸聖徒の近世に於るも亦然りとす。之を要するに、神が罪人を憐れみ之を受納し玉

ひたりしこと。及び今方さに之を受納しつゝあることは、是れ實に福音の純要點也。然れば則古代不完全なる彼諸聖徒を神が忍容し玉ひしことは、是れ今日の尙ほ不完全なる諸聖徒に對して神が亦之を忍容し玉ふべきことを望ましむる所以にして、即ち吾人に對する神の大獎勵と得はざるを得ず。

(3) 彼舊約書中の徳義に對する誤解的批評非難なる者其大部分は亦此點の誤解よりして起れる者なるが故に、苟くも前項の理義を解したる者に在りては、次の誤解も亦隨て自から消すべき也。彼舊約聖書に記載しある所の蠻的記事の多分は、理想を離るゝこと極めて遠き者にして、而かも其記者は是等蠻的記事の原始を恬然として理想としたる者、屢ば之れあり。然れども、何れの場合に在りても、人類が尙ほ不完全なる間は、其實際の法典……直接に神自身に由りて命令せられたる

者也。としてすらも……は人類自身の幼稚不完全に相伴連帶分配せざるを得ず。願ふに、神は一氣呵成的緊急命令を以て、人類をして完成せしめ得べきは勿論也と雖も、若し爾かする場合に於ては、其天啓や、徳義的よりも、寧ろ彼幻術的たることを免かれざるべし。是れ豈に神の欲する所ならんや。否、神の肯んせざる所也。若し神が人類をして正義に發達せしめむと欲するときは、神は人類に對し人道の諸理法と諸制限とを尊重せざるを得ず。神は古代史及び近世史に於て終始恒に在ること、言ふを俟たず。若し近世史をして、神の見地より記述せられしめたらむにもせよ、恰かも、吾人が彼古代史に於て發見する如く、他の一方より之を可疑的とし、若しくは非理想として發見せらるゝ部分の多々なるべきこと蓋し亦推して知るべき也。人民の心の頑冥が未だ全除せざる間は、其法典に於ても亦之と相應する所の不完全が尙ほ存

するを免かれず。若し古代史近世史共に神は恒に其歴史に存在するとせば、神は古代今代共に多分の事物が尙ほ悪しかるべきことを思ひ而かも、其惡事惡分が漸々消滅し去るべきことを神は欲する者なることを、吾人は斷言せざるを得ず。而かも彼往昔の諸聖徒に於ても曾て然りし如く、近世諸聖徒も亦其密接検査に於てするよりも、遠隔検査に於て好く見ゆるを常とす。故に完全は尙ほ未だ何處にも到來せず。『罪の赦し』は今も尙ほ福音の要部たり。

(4) 然れども、若し神が恩寵の神也とせば、且つ神の啓示が爾く貴重也とせば、其神啓が單に極小數の人にのみ限られて、而かも多數人類に與へられざるは何故なる乎。此制限は神秘に係ると雖も、是れ一般に於る神的方法の一端たり。蓋し冥想默思は神的交通の常態たり。新的眞理は天空に畫かれ出さるゝ者に非ず。亦一齊的大舉的に億兆

人類に授け與へらるべき者にも非ず。而かも、新的眞理は唯一個人若くは小數人の思想に於て迸發し、是より他に傳播弘布するを常とす。神の自啓的弘布の様式は唯此一法あるのみ。

然るに、吾人が此法を解するに當りて妨げらるゝ所の障礙は他無し。誤的概念……即ち逡巡後退する所の誤的概念……に在り。誤的概念者は以爲らく『天啓に由りて神は始めて至善の神と爲る者也』。是れ極めて神を狹隘視したる誤解の淵源たり。夫れ神は天啓を待ちて始めて至善の神と爲りたる者に非ず。神は最初より固より至善なることを天啓に由りて示さるゝ者にして、而かも神の至善と其恩寵とは天啓の有無如何に拘はらず、元始より既に存在し以て神の行動を決定する者也。此神即ち吾人人類の主キリストの神其父なる神にして、此父や天に於ても地に於ても寔とに吾人人類の父なるが故に、吾人は洗禮

を受けたと否とに拘はらず、彼幼兒墮地獄説を全く超脱したると同時に、亦彼『ヒーヅン』の所謂墮地獄説を、遙かに超脱したる者なること明らか也。

(5) 予は本書第一章に於て神が其獨子キリストを以て自らを億兆に啓示したることを述べ、而かも本章第一節に於て神の天啓がイエス、キリストに於て完成せられたることを云へり。此言は單に客觀的表示に於て正當なるのみとす。主觀的表示に於ては尙ほ未だ悉さざる所あり。即ち天啓の又天啓ありて今尙ほ方さに進行しつゝあることを吾人は敢て忘るべからず。キリストの言語は酵母也。種子也。而かも其意味と其轉形成的勢力とは聖靈の指導に由りて、其弟子信徒の彌よ發達し彌よ生長する生命と洞觀とに於て徐々と顯はれつゝありし也。最深の意義に於ては、眞理なる者は、唯其眞正に理解せられた

る刹那にのみ天啓せらるゝ者とす。此意味に於て、天啓は、未だ曾て寸時も休歇せずして、今尙ほ方さに進行しつゝあること知るべし。天啓は彼讀み得る所の誰人にも之を曉り得る書籍に記載されある者に非ずして、而かも、唯其平素準備ある心の奥底にのみ之を銘記せられ得べき者也。故にキリスト教は唯、徐々として人類心意の奥底に徹し深く沁入する者也。而かも吾人の内的「イルミネーション」が茲に成功するまでは或は吾人の昏盲に由り或は吾人の狭き想像に由りて、之が爲めに、キリスト教眞理をして隠晦せしめ或は拗曲せしむることあるを免かれず。然るに、其内的「イルミネーション」が彌よ成功するの曉には、新的眞理は言語文字の外に超然躍然として迸出すると共に、神は恒に吾心を直觀するに至る。蓋し「神は靈也。汝等靈と眞とを以て之を拜せざるべからず」と云へる聖言は多年吾人が稔誦する所也。而かも吾

人尙ほ儀文に拘泥し、神の恩寵を保つが爲めに某種禮典形式が必要なることを思ひ、神は儀禮の爲め幫助者たることを思ふが如き、智力的にも、亦徳義的にも、彼幻術及び魔術と同一水平に在る所の綜念に縛ばられつゝ、吾人自から之を脱することの何ぞ甚だ遅きや。豈に痛省せざるべけんや。

(6) 然れども、近年クリスチアン思想に於る太だ生長健全生長の觀るべき者あり。豫約的聖靈の指導に従て吾人は神の眞理に彌よ近づきつゝあるを覺ゆ。彼古代信條其經營の慘憺たる建造物構成物及び其細密なる解釋は皆衰頽消滅せり。而かも其代りとして、吾人は従前に比較すれば「よりも善く」且つ「よりも明白なる」理解力を有することゝ爲りぬ。即ち在天在地の父權が之に由りて名づけらるゝ所の父權其者に就き、世界に於る神の徳義的志望に就き、神が建設する王國に就

き各信仰的靈魂に對する神の接近親密に就きて、吾人は「よりも善き」
 『よりも明白なる』理解力を有することゝ爲りぬ。之と同時に彼從前
 行はれたりし所の器械的人巧的救拯の概念も亦衰頽せり。而かも吾
 人は律法の目的は唯愛に在ることを認識しつゝあり。詳しく言へば
 律法の志望は他無し、心と生活とに於て、恒に愛を生長せしむるに在る
 のみ。『よりも具体的』に且つ『よりも包括的』に之を言へば、キリストは
 即ち律法の目的也。即ち根本的目的は他無し、弟子に於てキリストを
 復活更生せしむるに在るのみ。彼從前行はれたる言語と典禮儀文と
 の器械主義を漸次に一變し去りて而かも真正活的生命的概念……即
 ち『神とは何ぞ』『神の意志は何くに在る乎』……の活的概念に化入せし
 めつゝある者は此洞觀也。

(7) 心理的生活は均衡法即ち平心力に向て傾往する者也。故に凡

俗多くは以爲らく習慣なる者は明白にして且つ正し而かも其習慣な
 るが故に明白且つ正しき也と。故に彼凡俗は習慣に違ふ所の行動は
 悪且つ多害と思惟するを常とせり。是れ世俗が革新を厭ひ保守を喜
 び而かも最良善なる改革に對しても亦多く之に驚く所以也。之と均
 しく、宗教的生活は、流行的慣習と流行的概念とに苟くも附名して以自
 から苟安し、而かも此習慣に違ふことは致死的禍害と視做しつゝある
 を常とせり。然るに、此くの如き受動的保守は誤りの太甚だしき者也。
 正實なる經驗に徴すれば、吾人は此くの如き受動的保守を痛除せざる
 べからず。吾人の生活は其概念の多々變化を歴て茲に永續する者に
 して、而かも其新的概念は舊的概念よりも生活の爲めに便宜幸福なる
 者なることは、經驗の明示する所也。聖書及び天啓の新的觀察に就き
 ても亦此經驗の事實は同一眞理たること明らか也。故に吾人は最早

や彼從前行はれたる如き陳腐なる口授的無謬的聖書を有するの必要無くして、而かも唯歴史に於る神の自啓と諸聖徒の思想感情に於る神の自啓との記録を以て天啓として視るべきのみ。是れ吾人が天啓に對する觀察の一大變化也。彼從前に於る觀察を染毒せし所の智的誤妄と不信とは、今や此變化に由りて亡滅せり。其代りとして、今吾人の手に入りつゝある所の者は他無し、吾人の希望及び靈感の源たる……洞觀……即ち『神とは何ぞや』『神の意志は何くに在る乎』……に就きて、彌よ天佑ある彌よ生長する所の洞觀實に是れ也。

基督教天啓論終

明治四十年五月十五日印刷
明治四十年五月十八日發行

定價金二拾五錢

譯者 小山正武

發行者 堀田達治
東京市京橋區銀座四丁目一番地

發行所 教文館
東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷者 ゼー、エル、カウエン
東京市京橋區銀座四丁目一番地

印刷所 教文館印刷所
東京市京橋區銀座四丁目一番地



複製 不許

○英^エ語^リ朗^オ讀^ツ法
Hand Book of Oral Reading by W. Elliott.

定價金 貳拾錢
郵稅

○英^フ語^ラ研^ン究^クの^ミ栞^ユ
Talks on the study of English by Prof. Frank Muller.

定價金 六十五錢
郵稅

○英^ハ獨^イ逸^ゼ語^ー獨^一案^先內^生
Guide to the study of German by Prof. R. Heise.

定價金 六十五錢
郵稅

○英^デ豐^ニ臣^ン秀^グ吉^氏の^著傳^著
A New Life of Toyotomi Hideyoshi by Walter Dening.

定價金 十二錢圓
郵稅

○英^デ昔^ニ時^ンの^グ日^先本^生
Japan in Days of Yore by Walter Dening.

定價金 二十圓五十錢
郵稅

○英^チ單^ヤ純^{ール}生^ス活[、]
Simple Life by Charles Wagner.

定價金 三十錢
郵稅

○英 ス先生著
英 詩 軌 範

Specimens of English Verses by W. G. Smith.

定價 金 七十五
郵 稅 八 錢

○英 シンブソン氏著
英 基 督 之 事 實

Fact of Christ by P. Carnegie Simpson.

定價 金 四十五
郵 稅 四 錢

○英 オ、エス、マーデン氏著
英 ウインニング、アウト

Winning Out by O.S. Marden.

定價 金 二十五
郵 稅 六 錢

○英 哲學博士藤東三郎著
英 孔 夫 子 の 倫 理

The Ethics of Confucius by Dr. T. Kudo.

定價 金 三十
郵 稅 四 錢

○英 青山學院教授 山田寅之助先生著
英 埃 及 聖 地 旅 行 談

聖地旅行談

定價 金 五十
郵 稅 八 錢

○日 根 本 正君譯
日 々 の 力

根本正君譯

定價 金 五十
郵 稅 六 錢

○歐 根 本 正君譯
歐 貧 兒 出 世 美 談

根本正君譯

定價 金 二十五
郵 稅 六 錢

○世 根 本 正君譯
界 最 大 の も の

根本正君譯

定價 金 二五
郵 稅 二 錢

○青 渡 邊 房 吉君譯
春 の 危 機

渡邊房吉君譯

定價 金 三十五
郵 稅 六 錢

○人 柏 井 園君著
人 類 兄 弟 主 義

柏井園君著

定價 金 二十五
郵 稅 六 錢

○ド 柏 井 園君譯
ラ モ ン ド 傳

柏井園君譯

定價 金 四十五
郵 稅 六 錢

○平 佐 藤 廣 吉君著
和 之 福 音

佐藤廣吉君著

定價 金 四十
郵 稅 六 錢

○幸 山 鹿 旗 之 進君譯
福 の 生 涯

山鹿旗之進君譯

定價 金 三十五
郵 稅 六 錢

○哲 神 學 士 田 中 達君譯
學 の 諸 問 題

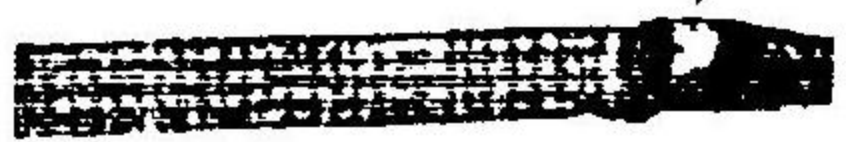
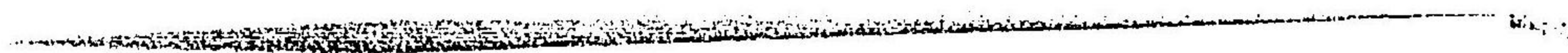
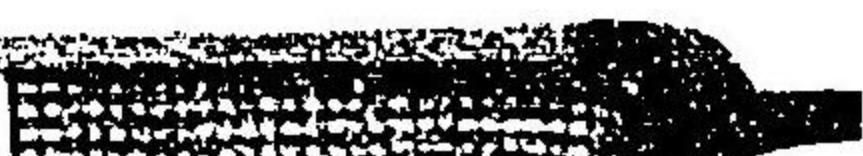
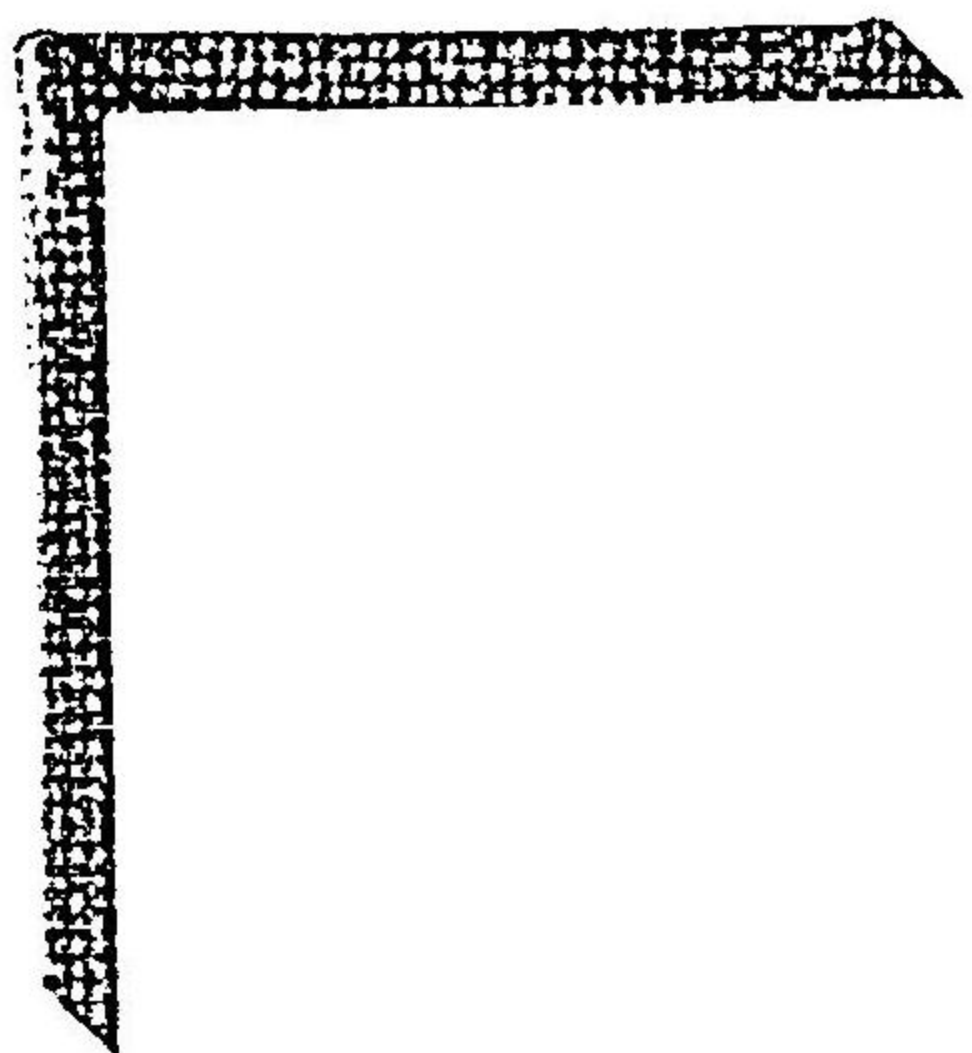
神學士田中達君譯

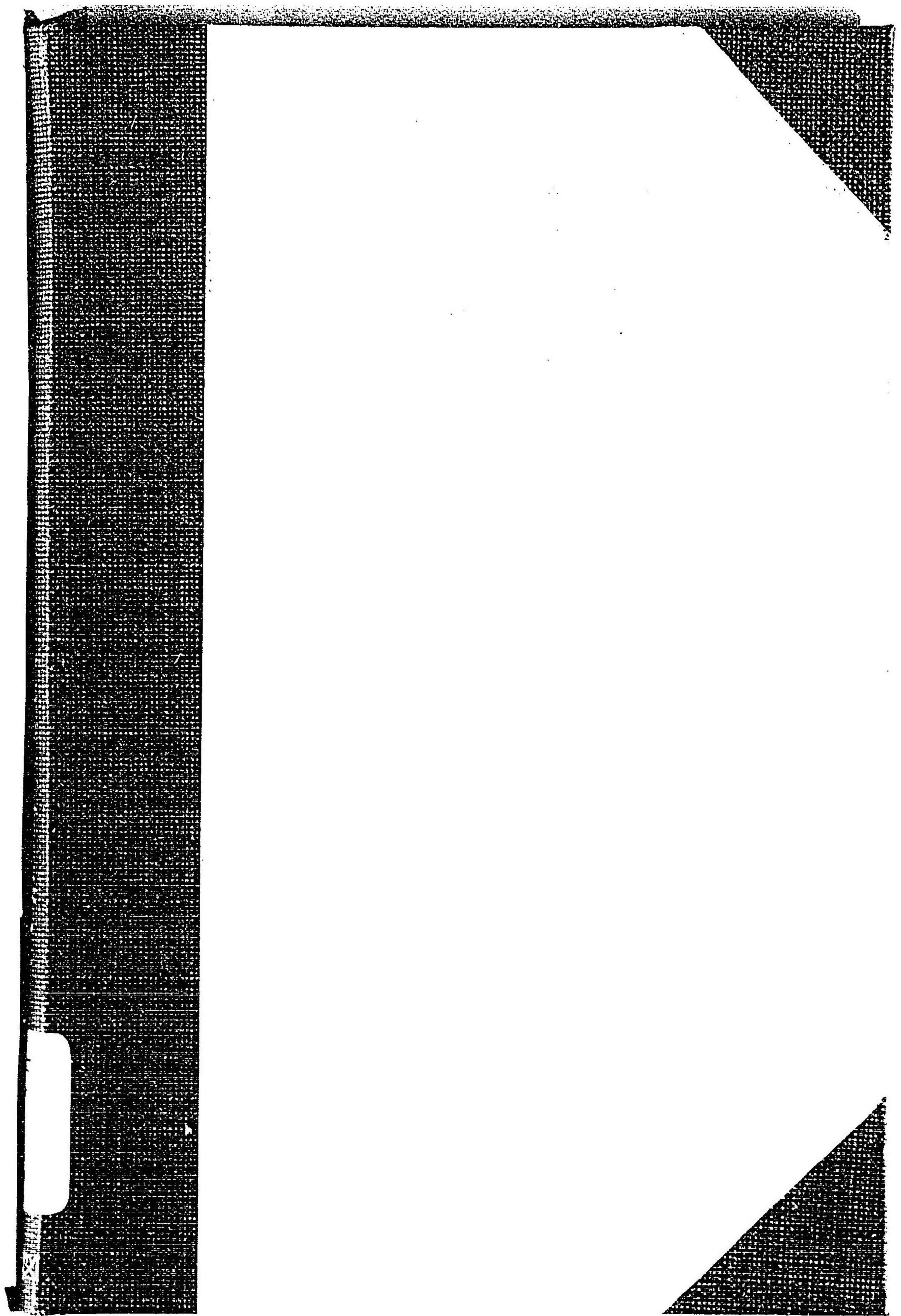
定價 金 三十
郵 稅 四 錢

○神 神 學 士 田 中 達君譯
の 觀 念

神學士田中達君譯

定價 金 三十
郵 稅 四 錢





325

23

020468-000-3

325-23

基督教天啓論

ボルデン・ピー・バウン/著

M40

ABI-0278



36.12.19